



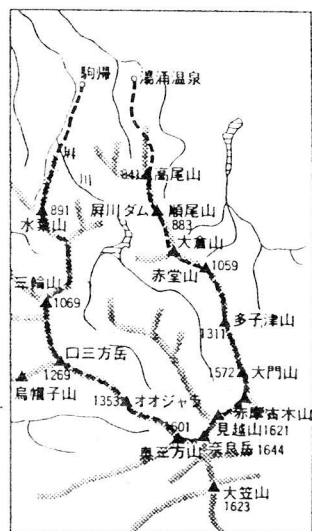
雪が多い赤摩木古山手前に行く

白山北方・犀川源流の山々を縦走
1984年3月27日～4月2日 藤田
章三、赤堀鏡三、卯野靖代、畠山潤、酒
井輝夫、小川隆（金沢大WV）
3月27日（晴のち曇り）湯涌からの林
道は雪があつて、ここより高尾山までス
キーのトレースがあつた。今年は雪が
かなり多く、ブッシュをこぐ必要は全くな
かった。高尾山を過ぎてテントを張る。
3月28日（曇のち晴）南岸に前線が
発生したため、視界が悪いが、高尾山か
らはガスの切れ間から雪に埋もれた犀川
ダムが見えた。この付近の尾根は人の通
った跡がなく、カモシカに混じってクマ
の足跡が点在している。赤堂山の頂から
は1129ピーク（赤磨山）が大きい。
赤磨山へはかなりのアルパイトで、ワカ
ンのない我々には腐った雪のラッセルが
きつかった。ここからの高三郎山は迫力
がある。頂上より少し下った地点に、テ
ントを張る。
3月29日（晴）春合宿からの疲れがで
てきて、ラッセルが思うようにできない。
今日は休養日として、予定の行程の半分
にとどめ、多子津山泊。多子津山からの
大門山は、加賀富士の名にそぐわず実に
堂々とした山容である。

3月30日（晴）いきなり大門山への長
い登りである。ラッセルがほとんどない
のが助かる。ダケカンバが見えくると
頂上は間近だ。大門山からシリセードで
下ると、10分もあろうかと思われる巨大
な雪庇が赤摩木古山にできていて。4月
だというのに、まだ早春のような感じ
である。晴れてはいるが風が強く、見越山の
急な登り下りはクラストしている所があ
り、少々緊張させられる。大笠山とその
手前の仙人岩が立派である。
奈良岳は犀川の源となっていて、金沢
市で最も高い山である。ここまで来る
と、今日の出発地点ははるかに遠く、高尾山
はもう確認できない。ザックをおいて空
身で奥三方山へ行く。急な雪壁を越えて
ピークに立つと、つい1週間前にいた大
笠山そして笈ガ岳の怪奇な山容が目を見
く。下りはシリセードで下る。1456
の鏡池泊。

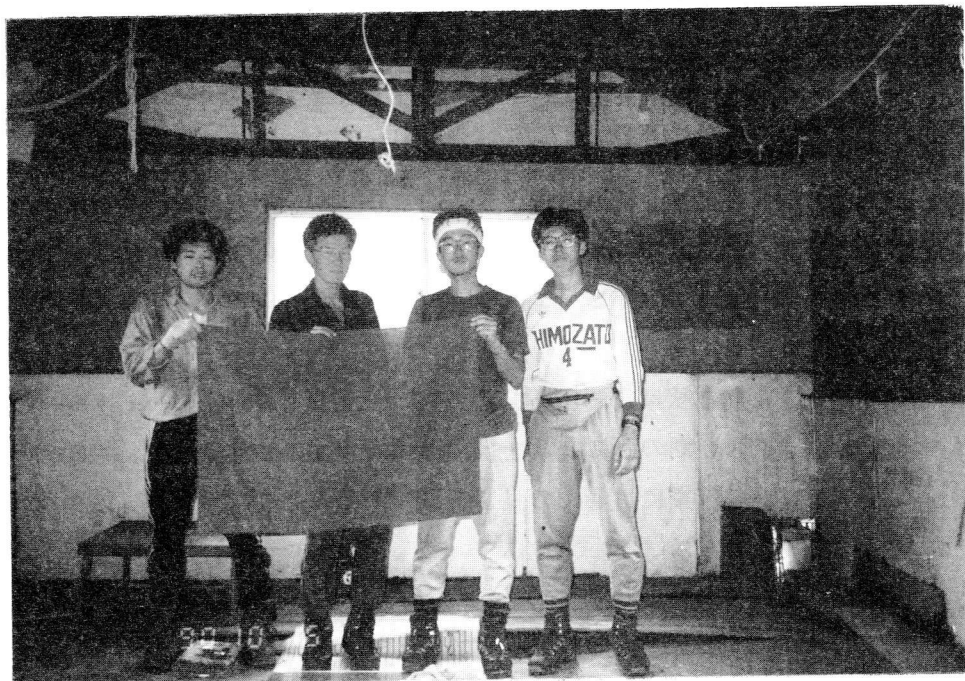
3月31日（曇り）明け方、寒冷前線の
通過で雪が降る。1353（オオジャラ）
の下りが急で悪く、西側からトラバース
ぎみに下る。下り口の大きな木の根にク
マの足跡が点在している。大きな音をた
てながら下る。下りきる前に下の雲海の
なかに入る。ガスで視界極めて悪く、現
在地がわからなくなつたので、中三方岳
手前にテントを張る。

4月1日（晴）雲海が下がったので視
界良好。中三方岳は空身でピークに立つ
た後トラバースする。1230ピークか
らは北側を下るが、亀裂がクレパスのよ



白山-BH単独縦走もした26期畠山さんのその後の
活動は、p. 87からの原稿に記されています。

うに口をあけている。口三
方岳のヤグラは、雪に埋も
れ、積雪量は718cmもあ
る所がある。ガスのなか三
輪山にテントを張る。
4月2日（晴）下山日
あるのかかわらず、小ピ
ークがいくつも連なり、つ
らい行程である。しかし絶
好の天気のおかげで、充分



【最終日 歴代の白山-BHPWの赤布がおどろおどろしい。

1990年当時のBHにて】

野田 草飼 奥出 磯道

「白山-BH」 PW

30期 野田和裕

金大ワングルは、たいへん活動域に恵まれていると思います。山域においては、白山・犀奥をはじめ北アルプス、そして少し足をのばせば南アルプス・八ヶ岳といった、日本でも有数の山域を足場に活動できます。一方、ロードについても、私の現役時代において、奥能登、木曽路、佐渡島など味わい深い地域で活動が行われました。

ワングルにおける山行はマイナー路線とメジャー路線の2色で区分することができるのではないのでしょうか。その区分けは必ずしも明確なものではないのですが、例えば、マイナー路線派は、どちらかというと北アルプスにおける梅海新道や南アルプスにおける光岳を選ぶ派であり、メジャー路線派は北アルプスにおける槍穂や南アルプスにおける甲斐駒千丈を選ぶ派と言った感じのものです。私の場合、秋期の白山-BHはマイナー路線の最右翼に位置づけています。その内容は、稜線歩きには違いないのですが、道が無い領域が含まれていることから、他のコースの追従を許すものではありません。さらに言うなれば、金大ワングルのホームグラウンドである、白山と犀奥を一挙に踏破するといった意味も有します。ワングル内では、むしろこちらの意義の方が大きいかもしれません。

当時、私はマイナー路線に重点をおいて活動していたほうで、犀奥・白山にこだわった方です。もっとも、私などは20期前後の先輩方の足下にも及びませんが、、、その理由は、好きだったということはもちろんですが、社会人になって行ける山よりも行けない山に行きたかったということです。トレ山やオロロの印象があるせいか、当時から部員の間では犀奥はあまり好まれていませんでしたが、行く時期や場所を選べばとても素晴らしい領域です。もっとも私の場合は、梅雨の時期に犀奥で泥まみれになることも嫌いではなかった方で、そこまでは強要しません。とにかく、犀奥の良さを知らずして金大ワングルを卒業するのは、たいへんもったいないことだと思います。秋の犀川ダム沿いに行くのは景色も素晴らしいです。アケビを採ることも、倉谷川ではアマゴを釣ることもできます。コースとして沢を選ぶと、技術的にも高い経験をすることができます。実際にかんりのルートファインディングが必要ですし、事故の場合に容易に救助を得られない点で、PWを出すにもかなり技量（ごまかし？）が必要です。秋期は藪こぎになりますが、体力とルートファインディングに優れている必要があります。ところで、国土地理院発行2万五千分の1の地図は非常に精密なもので、僅かな地形の変化でも読むことができます。ルートファインディングは、正に地図を読む技術と言えるのではないのでしょうか。

今回、GW期と秋期における2回の白山-BHを踏破した唯一の人間ということで、数多の先輩方を差し置き、30期の私に文章を書く機会を与えて頂きました。実際の白山-BHは大変魅力のあるコースです。GW期には春山の良さを満喫することができます。犀奥まで来ると藪こぎが多くなるのでやや幻滅しますが、達成感があります。春山コースとしてもそれほど難しくありません。第6次(1988年GW期)は、以下のメンバーで行きました（敬称略）。

石倉(31)、小林(31)、sL田丸(31)、L野田(30)

畠山さんほどの強行突破はせず、余裕を持った山行でした。小林（現、水越）さんはキスリングで来ました。このこと自体が記録ものですが、あまりお勧めできません。GW期とはいえ、初の女性踏破であり、しかもキスリングで踏破したのは最初で最後でしょう。

白山-BHは何と言っても秋期に尽きます。その核心は、三方岩～大笠までの藪こぎにあります。

第7次(1990年秋期)の場合、見越〜高三郎も殆ど道が無い状態でしたので、第4次と比較しても藪こぎが多かったと思います。それでも比較的難なく踏破できたというのが印象です。メンバーは、以下の通りです(敬称略)

磯道(33)、奥出(33)、sL野田(30)、L草飼(33)

仙人屈の池塘の美しさ、大笠の手前で台風が通過しフライに溜まった雨水で炊飯したこと、また個人的な話ですが、仙人屈あたりの藪で左目をついて目を開けることができず手ぬぐいを巻いて片目で行動したこと、などが深い印象として残っています。この踏破記録はワープロで作成しデータを保存していましたが、今回、舟田さんの勧めもあって、ここに原文のまま全てを掲載いたします。10年前の記録であり、現況とは異なるでしょう。地図や写真もなく、文章と多少の図だけで全20頁に及ぶ記録ですが、地図を片手に読んでいただければ正確に現在地が把握できるように当時は記述したつもりです。久しぶりに読んでみましたが、記録を読んでいると彷彿とさせるものがあります。

時代は急速に変わりつつあります。僅か10年前に記録の作成に用いたハードはPC-9801VM(8086プロセッサ、クロック10MHz)で、今使っているのはDOS-Vマシン(PentiumIII、クロック600MHz)です。両機種のパフォーマンスには雲泥の差があります。この10年間のパソコンとインターネットの普及、携帯電話やテレビゲームの普及など、情報技術の進展が、社会変化を起こしつつあります。人と人との思考格差も広がり世代間ギャップも深まるばかりです。ワングルOBについても例外ではありません。このような変革期においても、金大ワングルにおいて変わらないものの一つとして、白山-BHがそれであって欲しいと思います。三角テントやホエーブスなどの装備も残っているのかどうか知りませんし、現に創部当時の部室はありません。変革期であればこそ、変わらない何かを求める行動が意味を持つのではないのでしょうか。



【仙人窟岳付近より笈ヶ岳と大笠山

ヤブとヤブの間の、束の間の天国のような笹原】

磯道 草飼 奥出 (奥出氏提供)

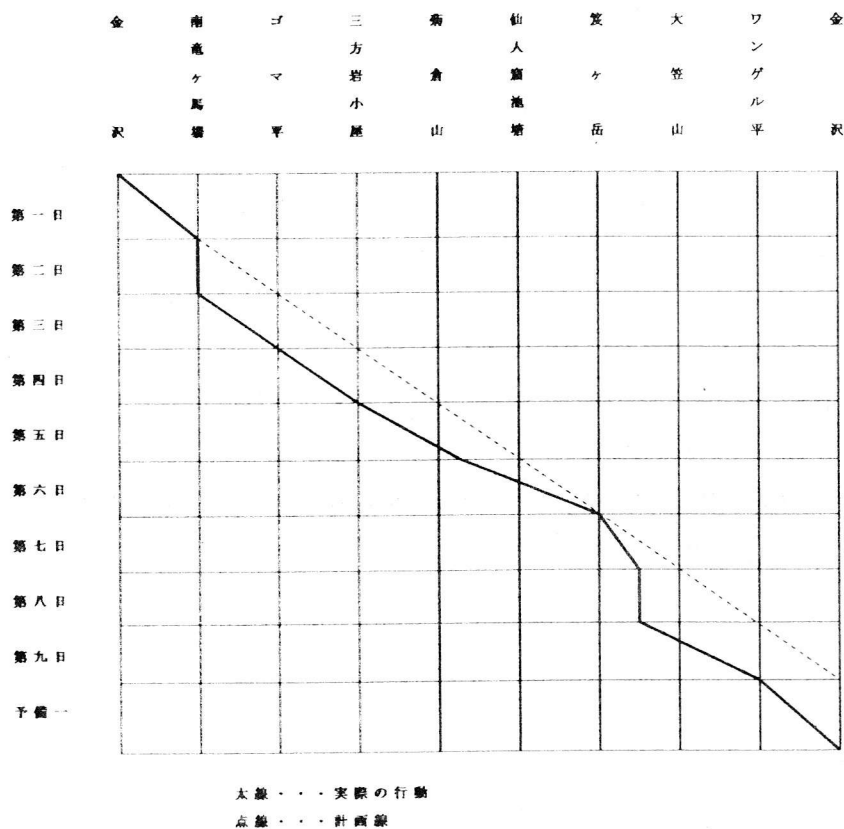
第 7 次 白 山 - B H P W 記 録 報 告 書

1 9 9 0 (平 成 2) 年 1 0 月 7 日 ~ 1 0 月 1 6 日 9 泊 1 0 日

・ メ ン バ ー

	磯道	操	(食料)	文 - 3	(33期)
	奥出	俊一	(装備)	理 - 3	(33期)
s L	野田	和裕	(記録)	工 - M 2	(30期)
L	草飼	信太郎		文 - 3	(33期)

・ 沈 没 表



(注 1) 第一日目は殿ヶ池ヒュッテに泊まる予定であったが、変更して南竜ヶ馬場とした。
(注 2) 大笠山には一日分の食料と水 10 ㍲をデポしておいた。

● 1 0 月 7 日

6 : 3 0 野町駅出発

台風 2 1 号の影響で昨日は土砂降りだった。本日は曇天。

7 : 0 0 鶴来駅でバスに乗り換え。

7 : 3 5 白山下駅着

今にも、雨が降りそうな天気。

7 : 4 6 白山下駅発

8 : 1 3 白峰車庫着

8 : 5 5 別当出合着

別当出合に着く前に大屏風がよく見えた。着いてすぐに雨が降り出したが、すぐにやんだ。白山自然保護センターのアンケート調査を受けた。

9 : 1 0 天気図をとる。台風接近が近い。観光新道を行き、殿ヶ池で泊まる予定であったが、南竜に変更。

1 P ----- (32min) -----
 9 : 4 6 (発)
 砂防新道入口に、甚之助谷が台風19号のため、崩壊したと書いてあった。
 御前峰ピークまではよく知られた道なので、簡単にしか記録をとらないことにした。
 10 : 01 1370mの転向点
 10 : 18 中飯場
 水道から水が出た。小雨、層積
 2 P ----- (26min) -----
 10 : 26 (発)
 歩き出して雨足が強くなって来た。視界は良好でチブリ尾根も観光新道の尾根もよく見えた。
 10 : 52 1760m
 3 P ----- (35min) -----
 10 : 58 (発)
 11 : 03 別当覗き
 この付近から、紅葉が始まった。
 11 : 33 甚之助ヒュッテ
 夏と違って樹勢が弱いためか、非常に眺めがよい。小屋の水は出なかった。昼食、高層
 4 P ----- (37min) -----
 11 : 57 (発)
 12 : 14 黒ボコ方面との分岐
 南竜小屋までの沢に3ヶ所橋があるが、橋板が外されてしまっている。
 12 : 34 南竜ヶ馬場冬季小屋
 こんな、台風の雨の中でも人客がいた。紅茶を沸かしてだべる。寒いので、小屋の中に
 テントを張った。
 15 : 00 食当開始
 15 : 50 食事開始
 16 : 00 天気図
 軽量化のため夕飯の米は一人1合しかなく、これでは少なすぎる。
 16 : 40 頃他の、東京方面からきたパーティー(10名程度)が帰ってきて食事を始めた。
 飯を食い終わると何もすることが無い。
 17 : 30 ~ 寝始める
 隣のパーティーは20 : 30までいろいろやっていた。聞こえたところによると、飯は
 食べきれないほどあって、こちらは腹が減ってしかたなかった。しかし、いくらすることが
 無いと言え、17 : 30から寝たのは初めてだった。

● 10月8日

4 : 00 起床
 4 : 30 頃から土砂降り
 5 : 00 朝食開始
 6 : 10 ラジオで詳しい台風情報を聞き、沈黙決定。
 6 : 30 ~ 何もすることが無いので、また寝始める。本当によく寝ることである。
 11 : 00 昼食
 11 : 30 頃雷雨となり、風雨ともに強まって来る。
 15 : 00 頃風は強いが、雨はやんだ。個人的にテン場の方に散歩に行った。
 16 : 00 天気図、食当開始
 寝るまで、怪談話などをした。
 20 : 00 就寝
 霧雨ではあるが星はよく見えた。

● 10月9日

4:00 起床

4:30 朝食開始

5:00 パッキング

5:25 日の出前で暗いので待機

1 P ----- (29min) -----

5:37 (南竜ヶ馬場発)

小屋から真正面に経ヶ岳が見えた。

鳶岩コースに行く。南竜小屋の横から開けた沢沿いの道である。石ゴロの道。

5:48 (2210m)

沢を離れる。ここから、所々大きな石(3m以上)が所々出て来る。よく滑る。

広い斜面を登る道であり、昔の道が(石を敷いた)所々出てくる。

6:00 雲海の向こうから日の出。道の所々に、霜や、霜柱が付いていた。

6:06 (2300m)

別山方面がよく見えた。

快晴、東方向に雲海。

2 P ----- (27min) -----

6:16 (発)

6:26 (鳶岩)

鳶岩を過ぎるとハイマツ帯の中の道である。道幅は広いので濡れなくて済む。コケモモが道の両わきに多い。

万才谷の雪渓は当然であるが、解けてなくなっている。万才谷を過ぎると広い荒野の道といった感じである。石ゴロの道となる。

6:43 (室堂)

わずかに雪がちらついた。小屋はひっそりとしていた。

曇、積

3 P ----- (32min) -----

6:54 (発)

御前峰まで、石の階段状の道で歩き易い。

7:26 (御前峰)

高三郎までよく見えた。写真を撮った。しかし寒かった。

行動水、快晴、消えかかった雲海。

4 P ----- (16min) -----

7:54 (発)

御前峰周辺は岩がゴロゴロしており、表面が凍っていて滑り易かった。また、下り口までは横風がきつかった。御前峰から剣ヶ峰方面へはジグを切った石ゴロの急な下りである。下りきると、火口原である。

8:10 (火口原の中間地点)

ここにザックを置いて剣ヶ峰にワンデリングをかけた。(予定外行動で結構ルーズ)

W1 P ----- (7min) -----

8:10 (発)

剣ヶ峰までは道無し。岩ゴロの急斜面を登るが、浮き石が多く危ない。

8:17 (剣ヶ峰ピーク)

ピークにはケルンや標識がある。

WR1 P ----- (9min) -----

8:31 (発)

8:40 (ザックを置いた地点)

5 P ----- (43min) -----

ここから、詳しく記録を付けることにした。

8:43 (発)

翠ヶ池に沿って地図上に示された道どうりにいく。実際歩いてみると踏み跡が見られなかった。

2600m付近から下りにかかる。この付近は火山灰の砂道で歩き易い。当初は緩やかな下りであるが、2550mから急な下りになる。立派なものではないが、所々、石が階段状に並べられている。しかし、結構苦むした道であり、この道を利用する登山者が余り多くないことがわかる。下り始めは道の両わきにハイマツがある。沢に近づくにつれ灌木が多くなってくる。

9:01 (2470m沢に出る)

沢に出た地点に岩に赤ペンキで矢印が示してある。沢の中は岩がゴロゴロしている。上部を見上げると結構急な沢である。(GWのPWではこの沢の中を下ってきた。雪が腐っていて雪崩が起きないか非常に心配しながら下った。) 沢と言ってもこの付近ではまだ水はない。

沢を横切り今度は沢の北側をトラバース気味にいく。夏は草が生えており短パンで行くとひどいところであるが、今は枯れていて歩き易い。道をはさんで間隔を1m程度あけて灌木が繁っており、その中に20cm程度の踏み跡が続いているといった感じである。

地図にある通り、少し行くとジグザグを下る。下りきって、広場の中の道となる。2350m付近の道の北側には、夏なら大きな雪渓があるがこの時期にはない。この付近は岩がゴロゴロしている。また、2350mには、標識がある。

やがてまた、トラバース道となる。トラバースは踏み跡20cm程度の土道。

9:20 (2260m付近にお花松原の標識がある)

この付近ダケカンバが多いが、昨日までの台風で葉が全部落ちてしまっていて紅葉は非常に汚かった。赤い実だけ残っていた。

9:26 (2416と2349の鞍部)

トラバース道からは結構眺めが良かった。剣ヶ峰もよく見える。晴、積

6P ----- (44min) -----

9:45 (発)

2349への登りの途中(2290付近)に2~3mの岩があり、岩の表面にステップがきつてある。2349までは北側の方が眺めがよい。2349周辺のなだらかな所はハイマツ帯となっている。

10:00 (2349ピーク)

2349ピークをすぎるとすぐに下りとなり、滑り易い粘土状の道となる。下りきると湿地帯にはいる。今後、間名古の頭まで湿地帯がいたるところに見受けられる。

10:09 (池塘)

地図が、"白山"から"中宮温泉"に入るところで道の南側に10×20m大の池塘があった。全然荒されていない。池塘の周辺は草帯となっていて、その周りにハイマツ、ダケカンバ、ナナカマドなどがみられる。

この池塘を過ぎてからも、カルスト地形みたいに穴ぼこや池塘があちこちにみられる。地図上で道の北西に窪地の印がしてある地点があるが、この付近が北弥陀が原と呼ばれている。

10:22 (北弥陀が原の標識)

標識は倒れかけていた。広々としていて、辺り草帯かハイマツ帯となっている。地図上で道の北西側に窪地印がついた箇所はハイマツに覆われているのが、ここまでの下りの途中から見えた。ずっと土道。

10:29 (北弥陀が原を過ぎた尾根上2150m付近)

北弥陀が原を過ぎて2168手前の尾根にはいると正面に奥三方がどっしりと見える。この尾根は歩き易い50cm幅の土道である。東斜面は草地で眺めが非常によい。紅葉もきれい。高層、積、ぼつりと雨が降った。行動水

7P ----- (42min) -----

10:40 (発)

2168への登りは笹、アオモリトドマツ、ダケカンバの灌木帯の中をいく。

10:55 (2168; 地獄覗き)

2168から少し北に行ったところと思うが、“地獄覗き”という場所がある。道の西側にあり、二畳分位の広さがある。標識も立っている。覗くと谷が見えるかというブッシュに隠れて全然見えない。

2168を過ぎると滑り易い道となり、下りには木の階段が設けてある。途中で気付いたが、一般的に南斜面は日が当たるので乾いた道で、北側斜面に付いた道は湿っぽく滑り易い道である。以後もずっとそのようになっていた。

11:00 (鶯平)

2168と2114の鞍部は鶯平である。標識がある。周辺は笹の原っぱで周囲に灌木がみられる。

11:06 (2114)

2114ピーク付近は平坦ではっきりしないが、ピークと思われた地点は広場になっている。別に何もない。

2114からはなおさら滑り易く、木の階段が多い道となる。間名古の頭に向けての急な下りはジグがきった道である。鞍部に下って少し登ると間名古の頭を北西にトラバースするようになっていく。

11:22 (間名古の頭のトラバースに入る地点)

トラバースにはいる直前でピッチをとった。(GW期の山行では、トラバース道が見つからなくて、間名古の頭を直登した。急だったが比較的簡単に直登できた) 曇、積、昼食
8P ----- (35min) -----

11:36 (発)

すぐ間名古の頭のトラバースに入る。トラバースは全体的に登り気味についてある。アオモリトドマツ、ダケカンバの樹林帯の中の道が三俣峠まで続く。小石がゴロゴロしているが、よくしまっていて、トラバース道にしては歩き易い。但し、夏期には下草が繁っていて歩きにくい。途中一箇所土砂崩れで道が塞がれているところがあったが大した規模ではなく危険もなくすぐに越えられる。

11:50

トラバースをぬけ尾根に出る。この直前に間名古の頭の標識があるがピークへの道があるわけではない。尾根に出た地点は前方に視界が広がるので気持ちよい。

11:54 (三俣峠の標識、地図とは地点が異なる)

地図上の三俣峠の位置と異なる地点に標識が立っている。県境から殆ど離れていない所の樹林の中に立っていて、峠らしい地形も見受けられないのでおかしいことがすぐわかる。

間もなく樹林から抜けて低い笹の中の気持ちのよい尾根道となる。軽くジグをきって下れば地図上の三俣峠である。開けた峠で、右手にシンノ沢が曲がりながら高度を下けているのがよくわかる。(GW期はこの沢の中を下って行った。上部では気持ちよく下れるが、下部はスノーブリッジに注意しなければならない。)

背の低い笹帯の中の道が続く。

12:11 (2077のトラバース道の途中)

2077のトラバースは50cm程度の土道で、トラバースだけは背の高い笹ブッシュとなっている。2077の南東方向の道上で休憩。丁度、フキが生えていたので草飼が食用として採取した。みんなどれだけ食う気があったか知らないが、結局、後で全部食った。曇、積

9P ----- (24min) -----

11:24 (発)

ゴマ平へ下り始める地点は左に曲がるのでよくわかる。下りに入ると北斜面であることから急に笹がなくなり、苔むした石ゴロの道となり滑り易い。下りはジグを切った道で、途中、三方岩や国見山方面、岩間元湯への道が見えた。ダケカンバ、アオモリトドマツなどの灌木帯の中の道であるので日は差し込まない。

12:47 (中宮道との分岐)

12:48 (ゴマ平小屋着)

小屋は分岐から中宮温泉の方向に行って左手すぐである。曇、積

水場は小屋の東側を通って少し下るとある。小さな沢で、水量は多くないので、ひどい干天時には枯れてしまいそう。今の時期は充分にあるし、今年の盆に来たときよりも多かった。小屋の周囲は樹林で覆われている。また、小屋の前は小さな広場となっている。

小屋の中にはいるには二重扉となっている。小屋の中は土間と二段になった板の間があり、二階へは階段で登る。最大で20人程度泊まれると思う。便所も用意しており、比較的きれいに使っていた。道整備用のシャベルなど、毛布2、3枚、自然保護センターが用意したノートなどがある。小屋の中は暗い。

中宮の方向から登山者が1名来て、野田と30分ほど話した後、室堂へと登って行った。

14:00も過ぎていて少し無謀と思ったが特に止めなかった。

15:20頃から、取ってきたふきを調理し始めた。皮をむいて、二回ほど沸騰させた湯で煮込んでアクをぬき、ラードで炒めて塩で味付けして食べた。ラード臭かったが結構イケた。

16:00 天気図

天気図を取り終わる頃から雨が降り出した。

16:48 食事開始 雨はまだやまない。さっきの人は大丈夫か心配になってくる。

18:30 小屋の中の気温計8.5℃である。非常に寒い。

20:40まで、歌集を歌っていた。腹は減るし、寒いのでろくなことはない。

20:45 就寝 ガス、小雨

さっきの人は果して無事に着いたのだろうか。一步間違えば雨の中遭難である。

●10月10日(体育の日)

4:30 起床

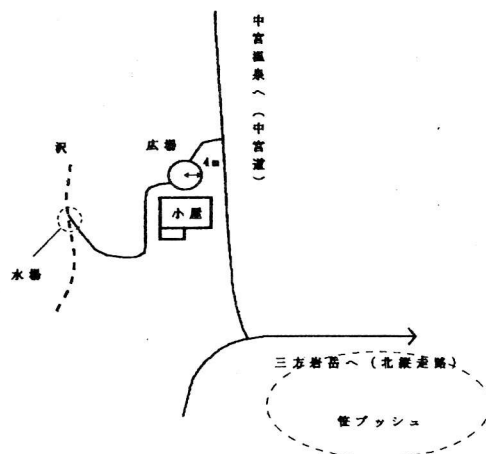
寒くて2時間ほどしか寝れなかった。起床時の小屋の気温は4℃であった。外に出てみると、笹の葉に薄く付いていたのはなんと雪であった。(この時期、山での雪は珍しくないとはいえ、今年金沢で初雪が降ったのは12/24であったので2ヶ月以上も早く初雪を体験してしまった。)、晴

5:09 食事開始

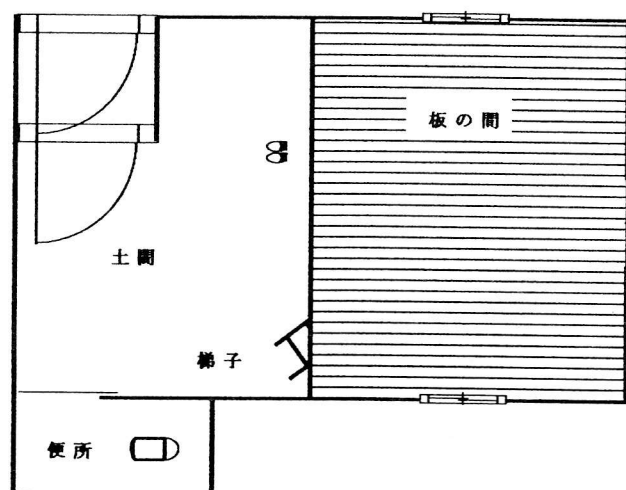
1P _____ (40min) _____

6:00 (ゴマ平小屋発)

ゴマ平を出て少し昨日の道を引き返し、左手に折れ、三方岩岳方面へ向かう。少しずつ登りながら東に進むと行ったところ。現在地ははっきり分からなかった。人も入らないので相当の悪路であり踏み跡もかなり薄いところもあるが、危険箇所は無い。台風の後であるためか石が濡れており滑り易いし、沢が何回か道を横切る。背丈以上の笹ブッシュが道の両わきにずっと続く。笹が道のまん中から生えたりして、登山者がいかに少ないかよく分かる。



ゴマ平小屋付近の地図 (上が北方向)



ゴマ平小屋小屋内部の様子（上が北方向）

6 : 34 (1850 m 付近)

1900 m 付近は兎平と呼ばれ確かに平坦な感じはするが、ひたすら笹ブッシュで何も見えない。1850 m からは土道か石ゴロの滑り易い下りである。一部急なところは木の階段が用意してあった。笹ブッシュは相変わらずで、視界は全然効かなかった。

6 : 40 (シンノ沢手前の小さな沢)

下りが終わって平らな所へ出るが、出る直前に2 m 幅の水量豊富な沢が横切っている。渡渉して休憩する。この付近アオモリトドマツの林で、地面はぬかるんでいる。北縦走路の案内板と野鳥の説明板が5枚ほどあるが、どれも傾いている。ぬかるんでさえいなければ水場も近いしテシ設適地になる。雪（少し）、曇

2 P (42min)

6 : 56 (発)

ぬかるんだ平坦な道を進む。周囲は笹ブッシュであるがさっきのように頑固ではない。だんだんシンノ沢に近づいてくるのが沢音からわかった。

7 : 05 (シンノ沢)

シンノ沢は15 m 程度はあろうか、コシアゲ沢より少し広く水量も豊富。沢は橋で渡る。沢のまん中に橋脚があり、鉄製の梯子を縦に2本寝かした立派なものである。沢からの高さも2 m 程度ある。

しばらく沢沿いに進み、やがて1786.5と1772の鞍部に出る。この付近、瀬領松と呼ばれるらしいが、立ち枯れたアオモリトドマツが数本あるだけであとは笹ブッシュである。ブッシュの高さは50 cm 程度だが、道幅は細くよく濡れる。

鞍部から登りにかかる付近で木の階段があった。登りの中腹までは見越山に似た登りで、木の根が張り出した土道、笹ブッシュ。上部に近づくにつれて笹の背が低くなり濡れなくなる。また、砂利道になってくる。

7 : 21 (念仏尾根の標識)

大体登りきった辺りで、念仏尾根の標識があった。ここから、快適な尾根上の道となる。笹の背も低く、当分見なかったハイマツも復活する。本来眺めが良いはずであるが、ガスっていて何も見えないのが残念。1772 周辺から背の低い笹帯となる。この付近南東側が数カ所ガレているが、ガスっていて下方が見えなかった。それほど危険とは思われない。

7 : 38 (1772 の次の小ピーク)

1772 の次の小ピークでピッチをとった。この付近、快適な土道。ガス、曇、積雲

3 P (52min)

7 : 50 (発)

1772 の次の小ピークから少し下り、また登ったところ(1760 m)に3 m 程度の岩がある。この辺からハイマツの根が張り出した砂利道となる。念仏尾根は全般的に尾根

の中心より南東側に道が付いているので、南東側の視界がよい。また、南東側は結構切れ落ちている。1762まで気持ちよい尾根道が続く。

8:10

1762を過ぎて進行方向を北に変える。10m程下って広い平坦地になる。この平坦地はぬかるんでおり、背丈以上の笹ブッシュ。少し行けば笹から抜け出て、地図でも明らかなように尾根の直下の東側トラバースとなる。非常に気持ちよい砂利道で右手に荻町の集落と鳩ヶ谷ダム湖がガスの晴れ間から見られた。

トラバースが過ぎると1710mの平坦地に入る。この平坦地はアオモリトドマツ、灌木と笹の中の湿った50cm程度の土道。1710mからの下りは笹の中の滑り易い土道。

7:28 (1710mと妙法山との鞍部)

この鞍部付近はアオモリトドマツなどの灌木帯。

すぐに妙法への登りである。登り始めは人工的に石を積んだようになっている。しばらくするとガレの多い道となる。登りの南東側が崩れていて岩肌が出ているが特に危険はない。登りは灌木の背が低いので視界がよく、スーパー林道も見える。登っている途中、陽がさしてきた。

8:42 (妙法山ピーク)

ピークは約10m×5mと縦長で広い。石がゴロゴロしており、標識と三角点がある。行動水、曇、積

4 P (50min)

9:00 (発)

ピークを出てから急な下りである。かなり古いがまだしっかりした木の階段がこの下り全体にわたってついている。眺めがよい。

9:10 (妙法と1756の鞍部)

東側に笹ブッシュがある。東側の一段低くなったところに池塘が見られた。1756へは東側に行くが、所々木の階段がついている。灌木帯中の土道であり、笹も刈り込んであった。1756は通らず、ピーク直下をトラバースする。トラバースを過ぎて1756と1780の鞍部付近はうっそうとしたアオモリトドマツの林の中のぬかるみ道となっている。1780手前の1700m付近から林を抜けて登りとなる。この登りは道幅50cm程度の砂利道でずっと階段が用意してある。右側はガレているが特に危険はない。背の低い灌木帯で景色が良く、荻町まで良く見えた。

9:50 (モウセン平の池塘)

1780を過ぎて少し行くと地図上で池塘の印があるところがモウセン平である。この付近だけ丸太を打ち込んだ踏み木が用意してあるので、この上を伝って行くことが出来る。ナナカマドも良く紅葉しておりきれいだったし、池塘も全然荒されていない。モウセン平には壊れたベンチと標識がある。池塘は2つ見受けられたが高層化しており水はあまりなかった。テン場に刈り込んだ後もあった。

5 P (33min)

10:05 (発)

モウセン平を出てからも丸太を打ち込んである。出てからすぐに、丸太の根元にナメコを発見、今晚のおかずにすることに決定。すぐに尾根上の道となる。地図上のガレマークの地点は実際も相当ガレている。全般的に左手はアオモリトドマツなどの背の高い灌木帯であり、東側の眺めがよい。上り下りの地点には必ずと言っていいほど階段が用意してあるので、快適に進むことが出来る。

10:38 (野谷荘司山ピーク)

ピークはダンロップのテントを縦に2つ並べた程度の広さ。ピークには三角点、標識有り。ピークからの眺めは良く、白山(正し雲で見えなかった)～鳩ヶ谷～三方岩・犀奥方面まで良く見える。スーパー林道からの観光客が数人いた。ここから結構人に出会うこととなった。今日は体育の日である。昼食、曇、層積

6 P (50min)

11:03 (発)

11:10 (鶴平新道との分岐)

鶴平新道の分岐は1797と1704の中間の小ピークにある。

大体は樹林帯中の中の土道であるが、ときどき右手に視界が良く広がる所に出る。視界が広がる所は、地図上にもたくさん見られるガレ場となっている。急なガレ場ばかりだが、落ちる危険性は無い。しかし、念仏尾根以来の北縦走路は本当に快適な道が続く。

11:53 (1736手前の鞍部)

この地点でピッチを取った。人に良く出会った。

また、1736のトラバース道は良く分からなかった。多分、廃道となっている。

7 P (17min)

12:06 (発)

1736への登りは階段となっている。

12:15 (1736)

1736は飛驒岩と呼ばれる。ピーク付近は道が走っているだけであり、あと顕著なことと言えば、杉の木が多く根が道の上に張り出している。

1736からの下りも木の階段となっている。

12:23 (三方岩岳加賀岩)

加賀岩の少し手前に三方岩小屋跡への分岐がある。

加賀岩のピークは人が多く、いつもそうであるように、観光客から注目を浴びるのであった。飛驒岩と違って加賀岩のピークは広く、標識、ベンチ有り。ピークから明日のコースを見てみると、1754までは踏み跡が付いているのがよく分かった。紅葉がきれいであった。

8 P (18min)

13:02 (発)

来た道を少し引き返して、小屋跡の方へ向かって下りる。飛驒岩の直下まで来ると、稜線上を東側にどんどん下りて行く。やがて、道が左側にそれて行くと同時に背の高い笹が出始めて間もなく三方岩岳小屋跡に到着する。

13:20 (三方岩岳小屋跡)

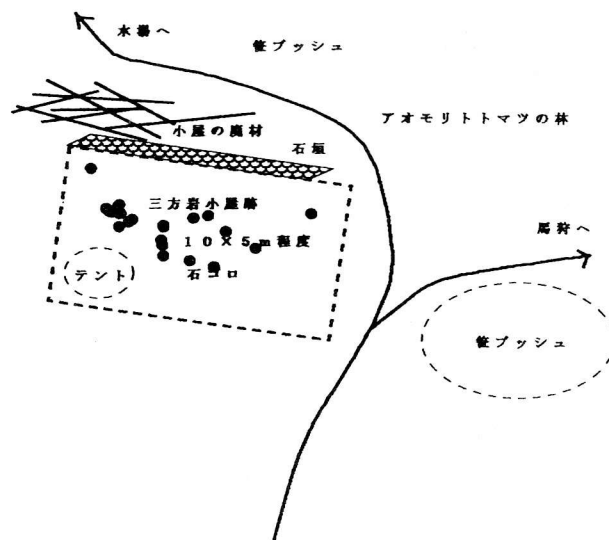
小屋跡周辺はちょっとした広場みたいに広く、周囲はアオモリトドマツとダケカンバの林である。眺めは無い。小屋跡は平で広いが、石がゴロゴロしていてテン設はやりにくい。水場へは2~3分程度で行くことが出来る。水量も豊富で干天時にも大丈夫だと思う。

15:15 食当開始

モウセン平で採れたナメコを、マルタイのスープで煮て食べた。うまかった。

16:00 天気図

20:50まで歌を歌った。寝る前、外に出しておいた靴が凍っていた。快晴。



三方岩岳小屋跡付近の様子

● 10月11日

5:30 起床

夕べも寒かったのでほとんど寝られなかった。自分は目はさめていたが、シュラフから出る気がないのでじっとしていた。すると、4:30起床のところが、一時間も過ぎてしまっていた。今日から、いよいよブッシュ突入と言うのに、いきなりフェイントがかかってしまった。

5:58 朝食開始

6:15 撤収、パッキング開始。一人4½の水歩荷。

1 P ----- (27min) -----

6:40 (三方岩岳小屋跡、発)

小屋を出てすぐは、背丈以上の笹の中の土道である。全般的に溝状となっており、滑り易い。1610m当りから尾根上の道となるが、灌木ブッシュである。灌木は歩き易いように刈り入れてあった。しかし、道の状態から推察すると利用者は少ないと思われた。尾根上から、後ろを振り返ると、北アルプスの山並が良く見えた。やがて、飛騨岩直下に出る。飛騨岩は巨大な岩である。2万5千分の1の地図には、飛騨岩直下の巻道が記載されているが、現場には見あたらなかった。

7:05 (北縦走路との分岐)

分岐には標識がある。

加賀岩まではすぐであるが、北側が岩場となっており、危険箇所はロープが張ってある。

7:07 (三方岩岳)

ピークには標識、ベンチ有り。非常に見晴らしのいいピークである。白山から、北アルプス、医王山、能登半島まで見えた。晴、絹雲

2 P ----- (36min) -----

7:26 (発)

三方岩からの下りは道幅1m以上ある土道で快適である。ぬかるみが多くて、滑り易そうな道であるが、凍っていて気にならなかった。全般的に木の階段が設けてある。

7:37 (県境と夏道との分岐点)

いよいよ藪へ突入である。分岐点は注意していればすぐわかる。三方岩からも良く見えるので、観察しておくといい。また、ピークから見たところ、県境上にうっすらと、旧道が残っているのがわかった。

実際に歩いてみると、確かに踏み跡がある。余りはっきりしない踏み跡だが、藪の薄いところを突いて行けば普通の夏道と余り変わらぬ速さで歩くことが出来る。1574の次の鞍部で少し迷ったが、踏み跡は忠実に尾根上に付いている。

ブッシュは背丈以上の笹か灌木である。木をまたいで乗り越えるとか、ザックにひかかるとかいうことはない。紅葉は汚かった。

1574次の小ピーク(1570m)は瓢箪展望台となっている。

8:02 (瓢箪展望台)

瓢箪展望台は最近出来たもので、ベンチと、木製の展望台がある。展望台への道は、西側に付いている。切株がごろごろしており、植生などを説明した看板があった。展望台と言っても三方岩岳の方がよっぽど眺めがいい。

3 P ----- (55min) -----

8:13 (発)

展望台からわかりやすい道が付いているが、1分も行くと途切れて、わからなくなる。しかし注意すると、やはり旧道の踏み跡が付いているのでそこをたどる。非常に分かりにくい、少し藪が薄くなっている。展望台過ぎの鞍部を過ぎ、瓢箪山の尾根へ取り付く付近では、旧道は県境上を行かず、少し西へトラバースし一気に尾根まで登る感じである。そして、1600mのピークの少し西側に出る。

展望台過ぎの鞍部付近は所々ブナや、松がある林となっている。全般に、背丈以上の笹と灌木ブッシュである。ところどころ、古い切株がある。

8:26

1600mのピークの少し西側の稜線に出る。

出た付近、東西に延びた溝状の地形となっている。その溝の中を西に向かって進む。溝幅は約5~7m深さは約3mといった感じか。溝の中は笹ブッシュであり、缶ビールの空き缶や、瓶ゴミがいたるところに捨てられてあった。

溝状地形となっているのは瓢箪手前1630m小ピークと1600m小ピークの鞍部付近だけで、どんどん進むと、やがて溝が途切れる。途切れたところで北側の斜面を少し登ると一本尾根になっていて、その上に明らかに道が付いている。比較的進み易い灌木ブッシュ中の道である。

瓢箪手前1630m小ピークは南側を通る。ピーク付近において、道の北側に南北に延びた溝状の地形(深さ約3m)があり、いままで来た道とT字形に交わっている。気にせずまっすぐすすめばよい。

しばらくしてまた、溝状の道となるが、すぐに、南側の斜面を少し登る。すると踏み跡が付いている。この辺からだんだんブッシュがひどくなってくる。その踏み跡どうりに行くと瓢箪山のピークに着く。

9:08 (瓢箪山ピーク)

ピークには何もない。背の高い灌木ブッシュに埋もれていて何も見えない。テン設適地なし。今回のピッチは全般的に旧道の踏み跡があり、楽に進めた。行動水。

4P ----- (58min) -----

9:22 (発)

瓢箪山から少し行くともう道はない。所々、踏み跡らしきものがあるが当てにせず、尾根上に行く。背丈以上の灌木、笹ブッシュで、乾燥していてほこりがひどい。眺めも悪い。

1650m付近だけ、杉の、木や根が大きく張り出していて進みにくい。しかし、その上に立って現在地を確認できる。尾根ははっきりしている。

10:20 (1650mを過ぎ、少し行った平坦部) 晴、絹雲

5P ----- (56min) -----

10:33 (発)

進み初めてすぐ、1650m過ぎの平坦部の途中に、白く立ち枯れた木(直径約1m)があり、その周りだけ円周状に笹が低く膝下程度になっている箇所があった。多分、落雷により焼けたものであろう。笹を刈り込めばテン設可能。眺めも良く、剣が見えた。

11:03 (1686)

ここまでの道、主に灌木混じりの笹ブッシュで、背が高いので日がさしこまない。やはり、旧道跡が所々見受けられる。注意していれば切株も見つかる。

1686付近、地形が平坦で進行方向がよくわからない。コンパスなどで確認する必要がある。少し行くとブッシュの隙間から国見、笈方面が見えたので進行方向を確認することが出来た。

1686からやはり旧道があった。道といってもわずかに藪が薄い程度のものである。溝状となっており、笹ブッシュで何も見えない。

11:29 (国見手前1680m小ピークと1686との中間点)

この付近地形が平坦で現在地がよくわからない。ブッシュは背丈以上で眺め悪く、日がさしこまない。しかし、日陰を行けるので、割合楽である。

近くのダケカンバに登り、現在地と進行方向を確認した。ダケカンバの上からみると、旧道跡がよくわかった。実際に歩いてみると殆どわからないが、上空から見るとよくわかる。昼食、晴

6P ----- (64min) -----

12:03 (発)

国見山手前1680m小ピーク上を通って行った。旧道跡かどうかよくわからない。小ピークを過ぎると一面深い笹ブッシュとなっている。だだ広い地形で、くねくね曲がりながら進む。ところどころアオモリトドマツが立っている。人は入っているようで、テープが見受けられた。

国見山直前の1680m当りに南北に走る溝状の地形(深さ約2m)がある。

溝の中に降りて、国見山に登るが猛烈な笹ブッシュである。しかし、すぐに終わり、平坦部に出る。

13:00 (1690 付近通過)

ピーク付近は灌木と笹ブッシュ。見たところではテン設適地なし。

13:07

1690 から真北に行った1680 付近で休む。笹方面が見える。よく見えないが、北側は比較的急に落ちている感じ。行動水、快晴

7 P ----- (69min) -----

13:22 (発)

仙人窟方面の稜線への入り口は厳密にわからない。左手に谷(トクズレ谷)を見ながら(見えないが)トラバースぎみに降りて行く。灌木と笹ブッシュがひどい下りである。踏み跡も全然無い。ブッシュの間から、正面に仙人窟だけが大きく見える。地図でも明らかなように、尾根の右側は広い。(GW期は国見山を通らずにこの広い斜面を通り、大きくショートカットすることが出来る。)地図上の矢印地点(1560m)にテン場(1張り)がある。このテン場は平坦で快適そうだが西側はすごく谷が切れ落ちているので危険である。

13:48 (テン場)

テン場から、笹が急に姿を消し、灌木だけのブッシュになると、所々踏み跡が出てくる。地図上では比較的細尾根であるが、東側の視界が余りきかないのでよくわからない。西側は、ものすごい谷である。テン場から少し行ったところ(地図のガレ場マークか?)で非常に危険な箇所があるので慎重に行く必要がある。この場所を過ぎればあとは問題無い。

14:31 (菊倉山手前1540mの平坦部付近)

この付近、灌木の枝を払えばいいテン場になりそうなどころがある。行動水、晴

8 P ----- (68min) -----

14:45 (発)

菊倉山付近、全体でテン設適地が4、5ヶ所ある。但し、菊倉山を過ぎると1646までテン設適地無し。菊倉山付近の尾根は広く、西側にブナがぼつぼつ立っている。菊倉山を過ぎるとあとはずっと稜線上の灌木ブッシュの中を行く。15:35頃(1646と菊倉山鞍部)

1646へは急登で、踏み跡らしきものがある。(無いよりはまし程度のもの)木を手づかみで登らなければならない箇所や、木をまたいで行かなければならない箇所があるので大変である。途中で野田が左目をひどく突いてしまった(視力がなおるのに1カ月以上かかった)。みんな結構疲れているように思えた。

15:53 (1646 登り途中の1580m)

国見山だけがよく見える。行動水

9 P ----- (46min) -----

16:06 (発)

16:42 (1646 ピーク)

ピーク付近は灌木ブッシュ。踏み跡無し、テン設適地無し。仕方なく、もう少し進む。

16:52 (1646 と次の1640m 小ピークの間地点)

ピークからも踏み跡無し。

なんとか、1張り張れるテン場を見つけたのですぐテン設する。灌木を木鎌で少し払った程度で張れた。藪の中で全然眺めはなし。

17:31 ブス点

あと記録無し、早々に寝たと思う。

● 10月12日

4:30 起床

5:05 朝食開始 水の無いマルタイ

5 : 4 5 撤収開始

1 P ----- (65min) -----

6 : 1 4 (発)

尾根上に行く。踏み跡もない、ひたすら灌木ブッシュの見通しの効かない尾根である。ところが、登りになると、立派な踏み跡が付いている(1650m付近と1660m~1700m)。刈り込めば立派な夏道になるほどである。昨日の1646の登りと違ってぐんぐん進むことが出来る。平坦部には踏み跡は無い。これは、GW期に南斜面の雪がとけるため、GW期の登山者が尾根道を利用するからだと思われる。)

7 : 0 2 (1700m)

ここからは、もう踏み跡無し。ひたすら灌木ブッシュ。西側にブナ林。

7 : 1 9 (1747手前の1720m)

尾根をそれることなく来る。テン設適地は昨日のテン場以来見あたらない。曇、高層、高積

2 P ----- (48min) -----

7 : 3 2 (発)

ひたすら灌木ブッシュの中に行く。眺め悪く、踏み跡無し。

7 : 5 5 (1717)

1747付近から、西の方向に尾根が広がる。1747を過ぎてまっすぐに行くと、東の尾根にそのまま入ってしまうので、適当な地点で進行方向を西側に向けてやる必要がある。我々も、適当に西側にそれて、広い尾根の方向に入って行った。アオモリトドマツが所々立っている、深い笹ブッシュ。灌木も混じっている。ときどき、笈が見えるので、地図で進行方向を確認しながら行った。

この付近平坦地であるが、笹が深く、よほど刈り込まなければテン設出来ない。

笹ブッシュを下り、仙人窟の1峰と2峰の鞍部に着くと、そこには湿原がある。

8 : 2 0 (仙人窟岳湿原)

湿原は、すぐに見つかる。図に示すように南北に上中下の三段になっていて、一番下の湿原にしか池塘が無い。しかも、水がくめる池塘は、直径1m、深さ50cm程度の小さなものが一つあるだけである。他のものは水深が10cm程度しかなく、干天時には干上がってしまうかもしれない。

下の湿原だけに水が集まるためか、下の湿原はだいぶぬかるんだ草地となっていて、上中の湿原は乾いた草地となっている。(従って、湿原と呼ぶのは変なので以後は草地と呼ぶ)上中の草地は、最高のテン場になる。特に上の草地は視界が広く北に開けて、眼前に笈、大笈をみることが出来る、一級のテン場である。中の草地と下の湿原はくぼんだ地形の中にあり、眺めはない。テン設は中の草地に2張り、上の草地に5張りはできる。

下の湿原の周りには、獣道と思われる踏み跡が付いていた。踏み跡はかなり踏まれているので、毎日のようにこの池塘に通っているようだ。池塘で一人4リットルに水を満たし歩荷。水は、池塘特有に薄茶色をしているが比較的澄んでいる。行動水、晴、絹雲

3 P ----- (65min) -----

8 : 4 3 (発)

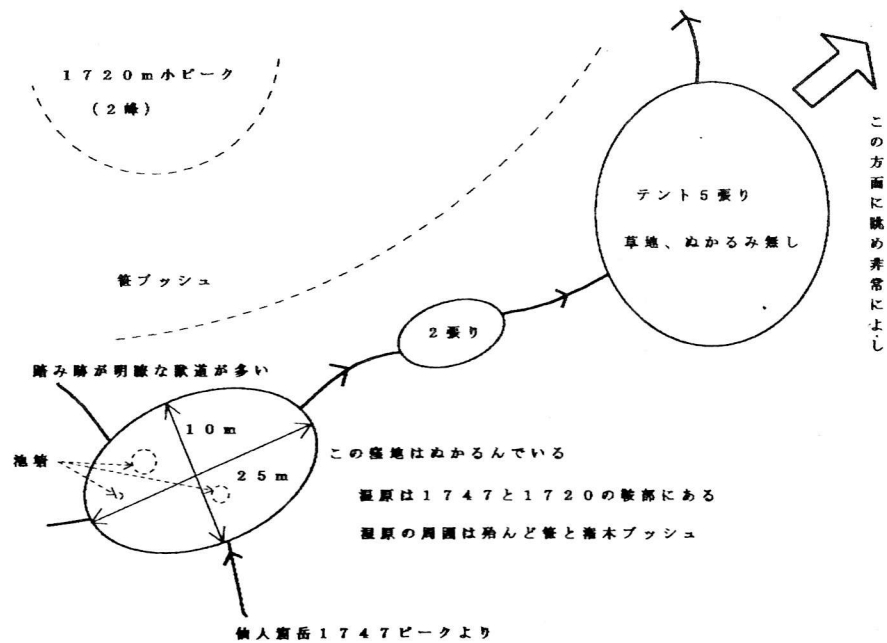
2峰ピークは直接通らず、東側を少し巻いて行く。再び、猛烈な笹ブッシュである。視界が無いまま、とにかく3峰(1700小ピーク)へとりついてよじ登る。ほぼ県境沿いに来ているものと思われた。

2峰と3峰との鞍部はブッシュのみで何もなさそうだった。沢の源頭部の溝状の地形が東側に見られた。

9 : 2 2 (3峰付近)

3峰手前に、思いもよらずしっかりした踏み跡がある。しかし、数10m行くと無くなる。あとは、細尾根上に行く。灌木ブッシュがすごく、枝や、根が張り出していて、なかなか進まない。しかし、背が低く眺めはよい。

9 : 4 8 (岩底キレット手前の細尾根上、図中に表示) 晴、絹、絹積



仙人窟岳の池塘付近の様子（上が北方向）

4 P ----- (54min) -----

10:02 (発)

同様な状態が続く。

10:19 (岩底キレット手前の1690m小ピーク)

笹を左前方に見るような感じで進行方向を間違えないように下る。下りも灌木ブッシュである。途中、灌木ブッシュから抜けるところがある。(1610m付近) 眺めがすごく良いが、草付きの急な下りであり西側が急であるので慎重に下る。東斜面は草付きとなっている。すぐに、ブッシュに戻る。

10:40 (キレット鞍部)

藪で、テン設適地無し。かすかに踏み跡あり。

熊のダイビングは次のような状況である。鞍部から少し進むと、尾根上に上から杉の根が大きく張り出した3m大の岩がある。この岩は、東側の少し下を巻く。どうっていうことはない。次は、本当の岩場である。4、5mの高さがあり、直下から直登出来そうにも見えるが、ザックを担いでいると危ない。そこで、西側にトラバース道が付いているのでそこに行く。15m程の距離を登り気味に行くとスラブ状の地形となっていて(高さ3、4m)そこを登れる。ホールドも多くすぐに登れる。但し、落ちたら危険である。(GWの時もこのスラブを利用した。雪も付いていなかった。また、藪が雪で隠れていたのので、下から熊のダイビングの全体を見渡すことが出来た。岩場は、帯状に東側に連なっているのが分かった。)

スラブを登り、少し東側に返すと地面が露出したテラスになっていて少し広がりがある。

10:56 (テラス)

テラスは狭いが、良い休憩所になる。ここから、岩底キレットや、岩底谷が一望できる。岩底キレットは名前通り、急なアップダウンである。晴、高層、昼食

5 P ----- (60min) -----

11:34 (発)

テラス付近は草地である。しかしすぐに尾根上の灌木ブッシュの中に行く。1690から岩が連続して尾根上に出てくる。初めは、3m大の岩の中をくねくね行く感じである。高三郎旧道のザック置き場みたいところが連続してあると思えば良い。最後のだけはでかい。”ジャンダルム”と言われているらしいが、高さが10m以上あるだろう。岩の東側直下の草付きを巻くが、特に危険なし。あとは、尾根上の灌木ブッシュの中をひたすら

行くのみである。

12:34 (冬瓜山との分岐手前 1730m 付近)

行動水、曇、高層

6 P ----- (48min) -----

12:48 (発)

13:00 (冬瓜山との分岐小ピーク)

いままで灌木ブッシュだったのが、ここから灌木混じりの猛烈な笹ブッシュになる。灌木をまたいだりしていかななくてはならないし眺めもない。

13:36 (小笈手前のテン場)

1750m に来ると、急に藪から抜け、目の前に草原の斜面が広がる。この斜面の下に立派な2張り程度のテン場がある(1750m 付近)。今日はここで泊まりかという雰囲気になった。

行動水を残し全部飲む。喉がからからだった。小笈を見に、草原の斜面を登ってみる。尾根上は灌木、笹ブッシュで覆われているが、尾根から少し外れた東側は草原となっており、その途中で、1張り程度のテン場が見つかった(1770m)。数10m下の方に池塘も見えた。実は、これらのテン場が、一般に”小笈のテン場”と言われているものらしいことが後からわかったのだが、小笈のピークにもテン場があると言うことを聞いてきていたため、その幻のテン場を求めてさらに前進することになった。

1750m まで戻って、再び出発。

7 P ----- (33min) -----

14:18 (発)

尾根上の藪の中を進まず、草原に行く。

1780m から小笈の登りである。登り直前は沢の源頭部の溝状の地形となっている。尾根上を登るが、笹と灌木のひどいブッシュである。

14:51 (小笈ピーク)

ピークは藪で覆われているが背が低く眺めよし。テン場などどこにもない。テン設不可。

8 P ----- (34min) -----

14:59

小笈からひたすら灌木と笹ブッシュが続く。灌木の株を乗り越えて行かなければならない登りであるので、きつい。小笈から笈まで案に行けるとどこかで聞いたことがあったが、とんでもない話である。しかし、なんとなく踏み跡が見える。

15:33 (笈ヶ岳ピーク)

笹を刈りテン場を広げて、テン設。1張りがせいぜいで、小笈のテン場の方が快適には違いない。しかし、笈のピークにテン設出来たし、距離も大きく稼げたので満足した。計画書の丸一日分をカットするスピードで来ている。食料を削ってまで軽量化した効果が現れたかもしれない。

笈ピークには、標識、地蔵さん、雑記帳がある。眺めよし。GW に来たときのメモが残っているかと楽しみにしていたら、持ち去られていてなく、残念だった。今年の夏に、東京都立大学が来たらしく、計画書が置かれてあった。そこで我々も、本PWの計画書を残して行くことにした。

16:00 天気図 このころから、雨がポツポツ降り出してきた。

沈澱をする可能性があったので、フライシートを利用して天水をとれるようにした。

20:30 就寝 小松方面の町の灯がよく見えた。

● 10月13日

4:30 起床 雨

5:13 朝食

明るくなるまで待機する。

8:20 撤収開始

高層雲が厚いが、一時的に雨がやみ視界も良好だったので、前進することにした。

1 P ----- (67min) -----

8 : 59 (笈ヶ岳発)

ピークから20~30m程踏み跡があったが、すぐに消えて無くなる。尾根上に行くが、笹と灌木ブッシュである。笹は細くて頑固でない。雨の後で、笹が滑り易くなっている。右側は草付きの開けた急斜面である。錫杖との鞍部近くに来ると、岩が出て来る。通行の障害になるわけではなく、西側を行けばよい。岩の東側は急に切れ落ちているようだった。錫杖への登りは急である。尾根上をたどったが、すぐ西側に溝状の地形が見えており、そこを行っても良さそうだった。

8 : 36 ~ 8 : 40 (錫杖岳ピーク付近)

錫杖岳ピークは比較的広いが、灌木ブッシュでテン設適地無し。余り顕著ではないが一番東側に少し高くなった所(つまり尾根)がありそこを行った。全く踏み跡はない。しばらく行くと、宝剣との鞍部への降り口に顕著な踏み跡が出ている。この降り口だけは、が低く眺めがよい。(GW期にもこの降り口から宝剣との鞍部にかけて雪がなく藪漕ぎになる。)降り口から、鞍部にかけて踏み跡が付いている。我々は、踏み跡を外して少し下ってしまったが、まもなく、踏み跡に戻った。踏み跡は、降り口からどちらかと言えば左前方に向かって付いており、笹ブッシュの中の急な下りとなっている。鞍部に近づくと東側の斜面が草付きとなっており、一カ所東側へ尾根を巻くところがある。

10 : 06 (錫杖岳と宝剣岳の鞍部)

鞍部付近、灌木帯でテン設不可。鞍部からも所々踏み跡があり、鞍部付近だけは非常にはっきりした踏み跡である。ピッチの途中から雨

2 P ----- (70min) -----

10 : 16 (発)

宝剣ピークまで所々踏み跡がある。やはり、登りになると春期に雪がとけるので、踏み跡がはっきりしている。宝剣ピーク辺り灌木ブッシュであり、かすかに踏み跡がある。ピーク辺り一本尾根で、南北にはなだらかであるが、東側は切れ落ちている感じ。(ブッシュで見えない)忠実に尾根上を行けば問題無し。

10 : 45 (宝剣岳ピーク)

宝剣からの下りも1650m付近までは、踏み跡らしきものがある。笹ブッシュに灌木混じりの中を行った。やがてその踏み跡らしきものも消え、笹ブッシュがメインとなる。笹の中の灌木がうるさい。1600m付近になると尾根が広くなり、進行方向が狂いやすい。しかし、この付近からブナ林が尾根より左に広がるので、ブナ林との境界を行けばよい。ブナ林の中に入ってしまうと、藪が余り頑固でないので進み易い。

11 : 26 (鞍部少し手前の1570m)

1時間以上歩き続けているので休んだ。体じゅうびしょ濡れであった。

3 P ----- (25min) -----

11 : 34 (発)

鞍部付近、沢の源頭部の溝状の地形が錯綜している。鞍部はかなり広く、ブナ林となっており、藪も薄く、すぐにテン設できるかと思ったが意外に傾斜地でテン設適地がなかなか見つからない。(もう少し千丈平の方へ行けばあるかもしれない)

11 : 59

余りいいとは言えないが、とりあえず、ブナの木の下にテン場を見つけてすぐにテン設した。雨

ブナ林の中なので直接雨が降り込まないのでよい。それでも、フライをたるませて張っておいたら、しばらくすると結構水がとれた。(2割程度)フライに付いている泥が溶けた泥水だったが、おかげで米の飯が食えた。(このころになると先が見えてきたので予備米を使い始めている)

16 : 00 天気図

16 : 25 食事

21 : 00 過ぎまで歌を歌った。最後は大声の四高寮歌でしめた。

● 10月14日

4:30 起床

5:02 食事開始

雨は降っていないが、風が強そうだった。しかし、ブナ林の中は全然吹かずで安心していられた。もし、笈ピークで沈黙していたらなかなか大変だっただろう。びしょ濡れにはなったが、昨日の移動は結果的に正解だった。悪天が予想されるときは、吹きさらしの所は避けるべきであろう。

とりあえず待機。

7:10頃から土砂降り

寝る。

9:10 天気図 寒冷前線が近い

このころ雷。下山後聞いた話によると、金沢はものすごい雷雨だったそうだ。

13:00になっても、風雨やまない。大笠は無理と言うことで沈黙決定。テントの中は水浸しとなり、食器で水を何回もくみ出した。

16:00 天気図

徐々に、雨が弱まってきた。

17:00 夕食

本日は、ジフィーズが初登場。うまいが、食器に半分もなく全然量が足りない。そこで、マルタイを食ってようやく腹六分目となった。また歌を歌ってから寝た。沈黙して疲れがだいふんとれた。

● 10月15日

4:30 起床

1 P ----- (57min) -----

5:59 (発)

初め広い尾根で進行方向がよくわからないが、ブナ林に沿う感じでクネクネとブッシュの中をいく。ガスっていてよけいにわからない。ブナ林を出ると猛烈なブッシュとなる。

1580mの小ピークを過ぎて少し行った鞍部付近に笹を刈ってテン設をした跡があった。この鞍部付近笹ブッシュとなっている。

鞍部を出てから細尾根にはいるが、当初はブナ林中を行くので笹も細く比較的進みやすい。だんだんガスも晴れてきて、登りの途中笈がきれいに見えて感動した。

6:56 (1650m)

この付近は、背丈か背丈以上の灌木ブッシュである。尾根より西にブナ林が広がる。踏み跡は昨日の宝剣以来全くない。曇、積、層

2 P ----- (67min) -----

7:06 (発)

1700mの進行方向が少し西に向かう付近で、テン設適地が2カ所ほどあった。一本尾根であり、尾根上は灌木ブッシュがひどく、根を踏み越えて枝をまたいで行く。

8:13 (1740m)

白山までよく見える。曇、高積、層

3 P ----- (36min) -----

8:21 (発)

尾根上をどんどん進む。ピーク直下になると笹のみのブッシュとなる。笹は西側に広がっており、東側は草付きの急斜面である。笹は背丈か背丈以下で、細いのでどんどん進む。

8:57 (大笠山)

ようやく大笠山に着いた。

一等三角点、標識、ベンチ2つ、テントは4張り程度張れる。昨日、昨昨日練習した四高寮歌を歌った。デポを回収した。このとき、デポしておいた水10ℓは、本日中にワングル平に着くとの見通しから捨てた。

白山から犀奥方面、金沢までよく見えた。曇、積、行動水。

4 P ----- (33min) -----

9 : 3 5 (大笠山発)

大笠から道がある。ピークを出てからすぐは、背丈以上の笹が道の両側から道を覆っている。道は土道である。

9 : 3 9 (桂方面との分岐)

標識がある。桂への道は、境川ダム工事のため通行止めになっているはず。

分岐を少し行くと尾根上を下り始める。背の低い笹が両側に生えた、踏み跡が30 cm程度の土道となる。下り始めだけ木の階段がある。1720 mの平坦部付近は溝状の地形の中のぬかるみ道である。(雨が降った跡だからかもしれない) 1650 m付近の尾根の東側にガレ場マークがあるが、危ない。このガレ場を過ぎると、植生が灌木になり、木の根が張り出した土道で歩きやすい。

10 : 08 (1668小ピークの北東側の沢の源頭部)

ピッチをとった付近は溝状の道となっている。このピッチをとった地点は、東側が湿原の草原(25 mプール程度の広さ)となっており、その中に小さな池塘がある。干天時に水があるかはわからない。曇、積

5 P ----- (56min) -----

10 : 20 (発)

次の1660 m小ピークはピーク直下の東側をトラバース。やがて、比較的細い尾根に出る。この尾根の両側灌木帯で、根が張り出した土道である。1591 mは東側に高さ2~3 mの岩が出ており、その下の草付きの斜面をトラバースしていく。滑りやすかったが、それほど危険ではない。1591 mを過ぎて、しばらく行くと、西側へ階段がついていて急に下る。(尾根から外れる)下りは滑りやすい。下ってから、はじめじめした深さ約5 m程度の溝状の地形の中の道となる。

尾根に戻ってからすぐに、奈良手前の二重稜線の中にはいる。(地図では二重稜線の東側の稜線上を通るようになっているが、実際の道は二重稜線の中を通っている)この二重稜線への入り口付近の東側に大きな池塘がある。笹の中にあり、気が付きにくい、道から見た感じでは干天時でも枯れないだろうと思われた。二重稜線の中は湿地帯で、雨の後なので水溜りが多い。木の丸太を寄せ集めて道を作っている。また、溝を横切るところは木の橋となっているが、ことごとくまん中で折れている。ほぼ中間地点に2張り程度のテン場がある。草の上で快適そうだった。

奈良への登りは急な溝状の道である。木の階段があり、背丈以上の笹に覆われた道である。ピーク直下にも1張りの快適そうなテン場がある。

11 : 16 (奈良岳)

ピークには三角点、標識(倒れていた)有り。テン設は1張りなら出来る。周囲笹ブッシュで眺め悪い。曇、積、昼食

6 P ----- (28min) -----

11 : 44 (発)

奈良から、笹と灌木の混じったブッシュで覆われた道で、視界悪い。鞍部に標識がある。(ブッシュに埋もれて分かりにくい)見越への登りは所々、木の階段がある。また、木の根がよく張り出した道である。大きく杉の根が張り出し、赤いガレが多くなるとすぐピークである。

12 : 12 (見越山ピーク)

標識有り。眺めよし。北側以外は周囲が急斜面の尖ったピークである。

7 P ----- (81min) -----

12 : 29 (発)

見越から1621との鞍部まで踏み跡が付いているだけで、あとは道がよくわからない。と言うか、踏み跡も何もないので大笠までと余り変わらない。所々古い切株が出てきたりして道があったとわかる程度となってしまう。

深いブッシュの中で現在地点がよくわからなかったが、結構溝状の地形が多かった。見越第3峰(1621が第2峰、その南側を第1峰、北側を第3峰と定義した)付近に少し

だけ踏み跡があった。この3峰からは急な笹ブッシュの中の下りである。この下りは踏み跡あり。

1521付近もよくわからない。東側の尾根に入ってしまったように注意していたら、逆に西側に行き過ぎていた。こんな所で、ルートファインディングが必要である。(昨年、磯道のPWでは高三郎方面から来たそうだが、今回は逆方向であるので、全然状況が違っている。)

13:50 (1521m地点から少しはずれた西側)

ピッチをとったとき現在地点はまだ未確認だった。南側に谷をはさんで急斜面が見えたので、西にそれすぎたということが推測された。

個人的ではあるが、こんなに時間がかかるとは思わなかった。昔、立派な道が付いていたとはとても思えない。(この付近での小屋作業は10年近くされていない)

8P ----- (26min) -----

14:03 (発)

東側に戻るとやはり薄く踏み跡が付いていた。下りでもありどんどん進む。この付近はブナ林であり、元々、藪も深くないが、やはり道は有難い。しかし眺めはない。迷うことなくワンゲル平に着いた。

14:29 (ワンゲル平)

ワンゲル平は2張り程度のテン場。水は5分ほど東側に沢を下って行けばとれる。水量は干天時でもとれるくらいある。(地図上で沢が合流する1350m付近、従って、30m程下る)

16:00 天気図

16:32 夕食開始

今夜は、大笠のデポ食料で食事が豊富であった。フルーツ缶や、ワインまであった。

20:30 就寝

●10月16日

4:30 起床、快晴

5:15 朝食

1P ----- (41min) -----

6:24 (ワンゲル平発)

1366は右手が少しガレている。1366までは踏み跡はしっかり付いてある。しかし灌木が育ってきており(特に西側から道にかぶさるように)歩きにくい。1366を過ぎて少し登り、広い尾根になると踏み跡は無くなる。

7:05 (1461手前の広い尾根に地図上で2つの1390m小ピークが見られるが、その2つの小ピークの間地点)

この付近、道跡は不明瞭で、周囲灌木と笹ブッシュである。全般的に尾根上の道ではあるが、ブッシュのため眺めは悪い。

2P ----- (53min) -----

7:17 (発)

天の又の頭(1461)へも背丈以上の灌木ブッシュで登りにくい、踏み跡はある。3年前に来たとき(犀滝~高三郎PW)より、明らかにひどくなっていた。

8:05 天の又の頭

ピークには何もなく、踏み跡が付いているだけ。背丈程度の灌木ブッシュである。

天の又からの下りは段差のある急な下りである。笹が多い。前方だけ眺めがよく、能登半島方面までよく見えた。海に浮かぶ島のように見えた。

8:10 (下りの途中1430m)

晴、高積、行動水

3P ----- (51min) -----

8:20 (発)

道はきっちりついているが、相変わらず灌木ブッシュがひどい。

9 : 1 1 (ホイクラ)

ホイクラからは、眺めがよい。白山もよく見えるし、二又川支流のタキ谷が正面によく見えた。双眼鏡でみると名前通り滝が多く高度な沢みたいだったが、詰めてみるのもおもしろいかも知れない。

ワングルの標識も健在であった。紅葉も、白山よりこちらの方がずいぶんきれいだった。

晴、高積

4 P ----- (36min) -----

9 : 2 6 (発)

ホイクラを発してすぐに一面笹ブッシュの下りとなる。背丈より少し低い程度で、下が見えない。下は土道であるが、見えないので思わず滑って転んだりしてしまう。笹ブッシュを抜けて、高三郎本峰との鞍部は北東側がガレて道が崩れている。別に危険ではないが、道は尾根上に続いているので下ってしまわないように。ガレ地点から高三郎まで灌木ブッシュの道である。一度、道を外してしまったが、大体は踏み跡がはっきりしている。

9 : 4 6 (高三郎ピーク)

三角点、標識有り。眺め悪い。

高三郎ピークからは略記する。必要があれば、数多い他の記録を参照のこと。

高三郎からは道がしっかりしており、道の有難さを思い知らされた。途中、犀川ダムが遠くに見える。

9 : 5 5 (ガレ場)

10 : 0 2 (新旧道の分岐)

分岐には相変わらず壊れた標識がある。

ブッシュで眺めは効かないが、上を見ると抜けるような青空である。快晴、昼食

5 P ----- (57min) -----

10 : 4 3 (発)

分岐を出てすぐに、ガレ場。

あとはワングルの作業の効果があって、快適な道である。

11 : 4 0 (旧道ザック置き場)

6 P ----- (37min) -----

11 : 5 1 (発)

12 : 2 8 (コシアゲ谷出合、旧道登り口)

コシアゲ谷出合に来て驚いたのは、沢筋が前と全然異なっていたこと。変わってから殆ど日数が経っていないとみえ、濁流の跡がみられた。以前、テントが張れた中州は今はいない。

この辺はまだ紅葉していない。晴、積

7 P ----- (30min) -----

13 : 0 0 ? (発)

カナヤマ谷の様子も変わっていた。BHまでの道から川を見ても何か以前と違っていた。沢筋が広がった感じ。

13 : 3 0 ? (BH)

旗揚げをしにBHによった。カメムシが繁殖していた。

8 P ----- (160min) -----

14 : 1 5 ? (発)

道沿いの至るところで土砂の流出が見られた。よほどの豪雨だったみたいだ。第2のガレ場は道がしまつて、草も着いてきており年々良くなっている。

15 : 3 5 (犀川ダム)

この時期にはめずらしく、ダムは満水状態であった。

16 : 5 5 (駒帰)

ダムから舗装道路がすっとのびている。休み無しにBHから駒帰まで行ったのは疲れた。なんとか最終バス5分前に駒帰に着いた。



【岩底キレットと笈ヶ岳
通称「クマのダイビング」
といわれる岩壁が見える】



【笈ヶ岳山頂にて】
草飼 磯道 野田



【大笠山への登りで、千丈平
を望む
ブナの森の鞍部で幕営し、
暴風雨をやり過ごした翌朝】
(以上 奥出氏提供)

夏合宿 白山・BH Party

37期 山本英男

今、この文章を書いているのは95年の10月だから、夏合宿から、かれこれ一年以上経っていることになる。従って山行中のすべてを覚えていたという状態ではないが、それでもやはり、今までの山行の中で一番印象に残っているものは、と聞かれたら間違いなくこの夏合宿が最初に残っているだろう。白山・BHの夏合宿を越える山行がしたいと、この一年間思いつづけていたが、今は、それだけの山行をやりとげる体力も時間もなくなってしまった。しかし、自分自身が納得のいくような、そんな山行をしたいという気持だけは衰えず生き続けている。

八月四日(木) 雲時々晴 オロロの洗礼をうける

北アルプス白馬岳でのさわやかな第二回トレーニング山行を終えてから、いよいよ夏合宿の本番の日となった。七月中に三方岩岳小屋跡にデポを置き、事前の準備にぬかりはなかった。

しかし、バスの予定の時刻になっても三浦が現われず、初日から、この山行の波乱予感させるような事態となり、みんなパニック状態におちいった。このバスを逃がすと次は十一時頃で二時間以上時間があいてしまい、打ち切り時間に間に合わなくなってしまう。しかし、兼六園下のバス停の向かいの道路に自転車道を必死にこいでいる三浦を発見し、事なきを得た。

バスの行き先はいつもの通りの駒場である。このときは「なんだか夏合宿に来たような感じがしないな。」などと佐川が言っていて、まだ第二回トレのさわやかさがぬけきれてないようだったが、待ちうけているあるものによって、夏合宿であるということを認識させられることになる。それはオロロとよばれる吸血アブの一種の虫である。ダムに近づくにつれブーン、ブーンという羽音が増し、特にある人のまわりをとびかっている。ある人とは誰のことであろうか。それは、昨年(94年)の小屋作業でみんなに「みち」と呼ばれつつづけた、そう、あの「みち字根」のことである。

この「みち」というあだ名については物議をいろいろかますところだと思いが、ここでは、本人のプライベートを尊重するため、あえてふせておこう。

すぐに出発する。ここからオロロはますますその勢いを増し、BH前のテング場ではピークとなった。小屋の中に貼るための赤布を持ってきていたが、あまりのオロロのすごさに、とっとと今日のテング場である新道入口へと向かった。十五時十分、テング場に到着したが、ここにも恐ろしくいらいオロロがいて、設営し終ったテントの中はオロロで真っ黒となる。あまりのすごさで、テントの入口が開けられず中にいる人間が蚊取り線香をたいて下におちてくるオロロをビニール袋の中に入れてプチプチ殺す。この状況がわからないみなさんは、ハチミツとりのおじさんがミツバチが入っている箱からミツをとりにくれている風景を思い浮かべてほしい。全くそれと同じなのだ。

オロロのため、水はしかたなく金山谷からとることにした。この谷の水は、昔、上流が鉱山だったため本当は飲んではいけないものだが、オロロには勝てなかった。しかし、このオロロ、一糸乱れず攻撃してくることからもわかるように、非常にまじめなものである。夜六時ともなると、オロロはみんな自分の寝床へ帰ってゆき、夜の倉谷をブラつくようなことは決してしないのだ。だから、夜は快適に寝ることができた。

八月五日(金) 晴 ワンゲル平は遠かった

予定より三十分早く起きてオロロに備える。旧道から高三郎山へ向かうのだが尾根の取りつきはいつもと同様、急できつい。三十分早く出発したがオロロは朝から元気だ。八百mぐらいいまだオロロも登ってきたが、その後は数も少なくなってきた。前高三郎(一〇八九m)より先は五月の新トレの時期と比べてブッシュがすくなく、足もとの道は草木をかきわけないと、どのようになっているのかよくわからない状態である。また、道の上にクマのフンがところどころにある。においもきつい。十時十分、ようやく高三郎のピークに着く。壊れた標識を笹ブッシュの中に発見する。背丈以上の笹のため視界は全くなく、ただただむしむししていて不快でたまらない。ピーク登頂を記念してナタデコ

コを食べる。このペースで行けば十五時ぐらいいワンゲル平に着けると思ったが、今日もとんでもない日となってしまったのであった。ホイクラまでは比較的はつきりした踏み跡があり、頂上からの眺めもそこそこ良く、笹の背も低い。ここからワンゲル平までは地図上のピークのあたりだけ踏み跡がある以外、あとはほとんどブッシュで、進むスピードが異様に遅くなり、疲れが一気に出てきた。天ノ又の頭を少し下った所で二時三十分頃休憩したのだが、疲れのため座っているだけで眠ってしまった。佐川の「山本さん」という一声がなかったら二時間ぐらいい寝てしまっていたのではないだろうか。高三郎を越えたところからガスが出てきて暑さは幾分やわらいだが、持っている水も少なく、絶対ワンゲル平まで行かなければならない追い詰められた状況であった。もうすでに僕は放心状態となり、頭の中では「ワンゲル平へ絶対行く」という言葉がぐるぐる回り、ゾンビのように歩いていた。

稜線を歩いていると左に少し下った所に灌木のない笹のみの明るい開けた場所に出た。時計を見るともう五時をまわっており、ここがワンゲル平でなかったらこれからの行動をどうしたらよいのかと考え十分な安心感はまだ得られなかったが、稜線から東側に踏み跡が続いているのがわかったとき、とりあえず今日はなんとかなったと安堵感にひたることができた。四年前の記録と比べて高三郎からの道はかなりひどく、無雪期だけでなく残雪期をのぞく全ての季節において人がほとんど入っていないことがよくわかった。テング場はヤブ用語集にも載っている「夢テン」というやつで、草原状となっていて美しい場所であった。(これは本当。)ところが、水場は今年の猛暑のためか、夏だからなのか、極端に少なく、水を汲むのに結構、時間がかかった。

八月六日(土) 晴 ヤブ明けパート1

気持ちのよい朝をむかえたのだが、皆、三日目にして早くも元気がない。しかし、昨日のヤブのスピードを考えても、遅くとも見越山南峰までは間違いなく行けるはずである。そう、いきなり山行三日目でヤブ明け(これもヤブ用語集にある。)となるのだ。そう考えると、歩きながらでも

思わずニヤけてしまう。

ワンゲル平からは踏み跡がかなりはつきりしていて案に進むことができた。出発から二ピッチ目に地図を見ながら休んでいると、聞き覚えのある羽音が、しかもたくさん近づいてきた。この稜線上でまたオロロかと思ったが、ブーンという音が小さく、どこことなく音に根性が感じられないふと、自分の体をみると無数のハエがたかっているではないか。しかし、ハエはハエである。彼らはオロロと異なり、真面目でもないし、攻撃もしてこない。スパーエクスパート・ヤブクライマー佐川は、「オロロと比べると、かわいもんだな。」などと、言っただけの体を全てハエにまかせていた。宇根はというと、やはりブライバシー保護のため、あえてふせておくことにしよう。

ハエとたわむれたピッチの後、恐しいほどの急登が待ちかまえていた。この時、我々は初めてヤブの急登をのぼったのだが、ほとんど木登り状態でひたすらすべる笹をつかみながら、腕力だけで登り続けた。たかだか五〇〇mの登りなのだが、バカみたいに体力を消耗するのだ。この急登は残雪期の場合でもアイゼンとピッケルが必要となる唯一の場所で、やはりかなりのものらしい。

急登から二時間三十分ほど歩いて、ついに見越山南峰に着いた。山行始まっての初めてのヤブ明けであった。三浦も宇根も小林も佐川もみんな、なぜかニヤニヤして、顔が異様なくらいにあやしく、つい僕もニヤニヤしてしまう。しかし、このヤブ明けは本物ではなかった。昼食をすませて出発すると、五分もたたないうちに頭がボーッとしてきて、ここは山でなく下界なのではないかと思えるほどクソ暑く、むんむんした空気につつまれた。三千m級の山を歩いて出てくるいかに心地よい汗とは異なり、汗がボタボタおちるといような言葉でも表現しきれないくらい、とてつもなく汗が流れた。見越山南峰から奈良岳の少し先までの稜線は、おそらく、夏合宿全日程中、最も暑さが厳しいところではなかったのだろうか。奥三方へのワンデリングは早々にカットして、先へ進むことにする。今日の予定のテン場は大笠山山頂であるが、地図を見る限り、山頂周辺に水場らしい場所はなく、また、暑さしのぎという意味を含めて瀬波川源頭の最も稜線に近いところへ、水を求めて汲みに行くことにした。当所、水を汲むのに必要と思われる二人だけに瀬波川へ行ってもらおうと思ったが、み

んな沢の水を飲みたがっており、全員で沢へ下降した。この沢は、他の沢と比べてさほど危険ではなく、水もちゃんと流れており、なかなか使えるところであった。それにしても、沢というものは砂漠の中のアシスといった感じで、流水のおかげで涼しく、いくらでも水がのめるので、ついつい長居をしてしまい、今日も五時近くまで行動することになってしまった。さらに、あらかじめ調べておいた草地の予備テン場の場所を感違いして見つけることができず、結局、道の上にテントを張った。二日連続の打ち切りブッチの五時まで行動となり、晩飯を作っているとき、全員がウトウトしていた。

その夜のミーティングで僕はこれまでの行程をふり返えると大笠山より先へ前進することは不可能と考え、フカバの尾根(エスケープルート)より下山して鳩谷まで国道を歩き三方岩岳に登りかえし、白山をめざすことを皆に上げた。そのことに対し、二年生の四人は何も言わず、反応がない。リーダーとしても、ここで「笈ヶ岳へ行きましよう。」とでも言われたら、多少勇気づけられるのだが、二年生の立場上そのようなことも言えずらいだろうし、何ともしっくりいかない夜を過ごした。

八月七日(日)晴 ついにヤブに突入
毎日毎日そうだが、今日も快晴である。大笠山への途中でサルの大群を道の右側に発見した。かなりの数である。一年のときの夏合宿でも、北アルプスの表銀座でサルと出会ったが、今回のサルの数は、この時の比ではない。じつと、こちらを見ていて微動だにしない。北アルプスより白山山系の方が、やはり、自然が多く残されているのではないだろうか。

テン場から一汗かくと大笠山の山頂にきた。頂上からの眺めは、雄大でさえるものではなく、笈ヶ岳も手にとるほどの近さに見える。笈ヶ岳とともに白山山系北方稜線の盟主だけあって、大笠山は美しく立派な山である。

大笠山と笈ヶ岳――この二つのことを意識し始めたのは、OGである舟田さんから「白山国立公園とその周辺の山々」という本をいただいて、何気無しに読んでいたときだった。その時は、特別強い印象を持ったということはなく、いつかいつかみたい程度の軽い気持ちしかなかった。

しかし、それからしばらくして、残雪期にこれらの山へ行くPWが出され、参加することができ、その山行の中で、僕はこの山域に対して一種のカルチャーショックのようなものを受けた。たかだか千八百mの山々はその高さを感じさせないほどのありあまる魅力をもっていた。

そんな一年前の出来事を回想しながら笈ヶ岳を眺めていると、昨日のミーティングで自分が言ったことを撤回して先へ進む決意をした。それでもやはり、頭の中の中には、「もし遭難したら……」という強迫観念が居座りつづけたままだったが、みんなに「ザック持って、出発するから」と告げて、自分自身をもう引きかえすことのできない状態に無理矢理追いこむより他に方法はなかった。

大笠山からの下りは背丈以下の笹の斜面や、心地よい風の通るブナ林でどんどん進むことができる。稜線の右手には、千丈平の広大な笹原が横たわっており、この山の奥深さをよく物語っている。大笠山と宝剣岳(笈ヶ岳の前衛)の最底鞍部のあたりは二m以上あると思われる猛烈な笹ブッシュをかきわけてゆく。笹ブッシュにもいろいろなものがある、主にその高さに特徴があると思う。背丈以下のものなら、視界がよくきいて快適なのだが、背丈よりはるかに高いものだと、自分の現在地がわからないだけでなく、まわりすべてが笹で下界や一般的の登山では出会うことのない不思議で一種独特な空間につつまこまれる。ヤブに対しての好みは人それぞれ異なるだろうが、僕が一番嫌いなのは垣根と呼ばれるブッシュだ。これは尾根上の中心から放射状に枝をのびし、かつ、笹など他の植物と比較しても弾力があり、人をよせつけない。目の前にこいつがあるとわかったとき、一気に疲れがでてヤル気さえうせてくる。

僕は垣根でもほとんど直登してゆくが、宇根はよく右から左から巻いて垣根を処理していた。ヤブこぎはその人の個性や性格が歩き方に表れやすいところがなかなかおもしろい。自分で道(歩くところ)を決めてゆく要素が最も大きいのはヤブこぎではないだろうか。雪山でも、自由に歩くことができるが、雪庇や雪崩のことを考えると、ヤブこぎほどその自由度は大きくないだろう。

最底鞍部から境川源頭に水を求めて下降してゆく。今日も水がすぐ発見することができラッキーだ。しかし、この下降が一番恐かった。宝剣岳への登りは残雪期によく人

が入っているためか、はたまた、昨年の秋の成城大のワングルのおかげか、踏み跡がかなりあり、歩きやすかった。結局今日も予定のテン場である笈ヶ岳まで行くのはあきらめて宝剣岳の山頂でテントを張った。ここは夢テンというほどではないが、下に笹があって、仲々良いところであった。目の前に見える笈ヶ岳は大笠山から見るとそれより、はるかにスケールが大きく独特の雰囲気をもたせていた。

八月八日(月)晴 笈ヶ岳に立つ

ほとんど毎日、起きてから出発するまで二時間はかかってしまう。メンバーが五人しかいなく、二・三年生だけなのに。理由は簡単だ。夜シユラフにもぐって横になっているときが唯一の現実から解放されるときであり、やすらぎの時間だが、朝、起きたその瞬間から、現実をいやがもうにも直視しなければならぬ。皆、ヤブこぎを開始する時間を一分でも遅くしたいのだ。僕にも、そんな気持ちがあるのでどうしても撤収を速くしろとか、きついことを言えない。しかし、出発する時間が遅くなると、昼の最も暑い時間に長時間行動しなければならなくなり、ひいては、予定のテン場まで行けず、ヤブの中での日数が増えるという悪循環におちいってしまう。まさに、「どはまり」である。(みんな、山口君が「どはまり」という姿を思い浮べながら言ってみよう。)

テン場からところどころ踏み跡のある尾根をたどること二時間半、ついに念願の、この山行のメインである笈ヶ岳に登頂した。登頂した時刻は八時四十分で、山頂には大きなダケカンパの木が一本ある他、さえないものがなにもなく、「炎暑」といった感じである。駒場バスをおりてから五日目、毎日毎日、ほとんど打ち切りブッチの行動でアツという間だったような気がする。

笈ヶ岳からしばらくの間は垣根のヤブにはばまれたがその先の東側斜面は草原となっており、ニコウキスゲも咲いている。東側の沢に水を取りに行こうとしたが、十mぐらいの涸れ滝にはばまれ敗退。テン場をさらに先の夢テンに移し、その後水たまりの水を飲んで今日の行動を打ち切った。入山以来、ひさしぶりに早くテン場に到着、午後はゆっくり過ごす。このテン場は、ヤブに突入した中では最も状態の良いところで、ちょうど一程度地面がでていて、傾斜がほとんどなく快適そのものだった。

そういえば、パーティーの構成が三年生一人に二年生四人であることはこれまで読んでわかっていただけに、たと思うが、どのようにしてできたのか、不思議に思った人もいるのではないだろうか。そんな人々のために、「パーティーができるまで」ということについて簡単にふれてみることにしよう。(37期のみなさん、まあ、当時の3Mは時効ということで先をどんどん読みましょう。)

夏合宿の行き先を決める3Mで僕は、いきなりみんなに部活をやめるといった。これはいつもの計算しつくされた策略ではなく、ずっと前から考えていたことであった。それは、94年の夏が93年と同様、部全体としての行事のため、日程が限られてしまい、僕が当時やりたいと思っていた南アルプス全山徒走が行えそうになく、満足のいくように夏休みを送ることができず、また、部活動のメインである夏合宿にいかなくなってしまう以上部活を続ける意味がないと思ってそんな発言をしたのだ。ところが、その意志は弱いというのか、その頃、後輩の佐川や小林からもちかけられていた夏のヤブ山徒走というのにも魅かれていて、みんなにおきまりの説得をうけて、それなら、ヤブに行こうと考え、夏の白山-BHが出されることになったのだ。この山域にした理由は部内に記録のある唯一のヤブ山であり、故・長崎氏の「わが白山連峰」で挙げられていた、高尾山から岐阜の大日ケ岳までの積雪期の徒走のことが目にとまって、同じコースを歩いてみたいという単純で自分勝手なものだった。

ところが、一年生に書いてもらった事前の夏合宿の希望調査では、なんと全員、第五希望だった。誰か一人でも第四希望を書いてくれればその人を連れていくつもりだったが、これではどうにもならない。クジで決めようかとも考えたが、行きたくない人を連れてゆくわけにもいかない。結局、3Mでは何も決まらなかった。

八月九日(火)晴 仙人窟岳の池塘へ

昨日、早い時間にテン場についておかげで体の疲れは幾分とれた。岩底バットレスまではジャンダルムのようなものがブッシュの稜線にいくつかあって今までにはない開放的なヤブこぎを楽しむ。岩峰群の一つに登ってさわやかな朝の風景にしばし見とれる。三六〇度さえるものはなく、尾根の西側には境川ダムや人形山、南側には仙人窟岳や白

山のぞめ、自分達のいる場所の奥深さを改めて認識させられる。

バットレスの下降点には細引がついており、踏み跡もすっかりしている。尾根の東側は絶壁で西側より下ってゆく。下部は一枚岩でさらにその下は草付の急斜面となっている。十一時頃からガスを下ってくるが、今日も早めにテン場に到着(発見する?)ことができた。午後一時に仙人窟岳の池塘にとびだすと、池塘を中心に放射状にけもの道がついている。池塘の水の中には小さな虫が飛びはねていて、茶褐色をしている。少々ぬるいが水はこれしかないのがガマンしてガブガブ飲む。池塘の最上段からは大笠・笈がせまってこの上ない最良のテン場である。

ところで、この山行が行われた一九九四年の前後に、部に在籍していた方々はこのメンバー五人を御存知だと思いが、そうでない人々のために簡単に紹介しておく。

まず、宇根悟史。言うまでもなく宇根はワングル一、弱い人間である。体力がないからというわけではない。なぜか弱いのだ。(もちろんワングル内だけでなく学校でも弱い)そして、「うっ」というのが口ぐせである。しかし、北アルプスや南アルプスなどメジャーな山々はほとんど登っている。一時期、彼女を求めて女子大(今の金沢学院大)で手あたりしだいに女の子に声をかけていたという、うわさがあつたが……

次に小林俊夫。ミスタードーナツでさわやかな夜のバイトをしている工学部生である。最近ピンクのトレノを乗りまわしてあちこち行っているらしい。「ゲシュタポ」というあだ名があるほどワングル内随一の情報通で私もその部下の一人である。

そして、ヤブ大王こと佐川貴久。マイナーな会津や東北方面の山々をこよなく愛しているロングゲのあやしい文学部生。現在の部の主将を務めているが小屋作業で足を痛めてからパワーが弱った。なんでも食べる人間で、以前はタイ米を推していたが、今は麦飯に凝っている。

二年生最後は三浦永士。三浦がこのパーティーに入ったのは夏合宿の結団式の時だった。夏合宿のメンバーが決まらず、三浦がヤブへ行ってもいいと言っていたという情報を「ゲシュタポ」から聞いていた私が、犀川の河原で突然「三浦、ヤブに来てくれないか?」と聞いたたら、「ああ、いいですよ。」と言ってくれて、その一言でこのパーティー

はできたのだ。もし、あの時、三浦がいやだと言っていたら、あの場で一年生にジャンケンをさせて決めたかもしれない。ちなみに、第二回トレン山で女子大に声をかけたのも三浦だ。

そしてこのパーティーのリーダーである山本英男。ワンゲル一のスーパーエキスパートクライマーで数多くの後輩から親われている良い人間である。決して悪人とか言われず、部内に敵は持たない穏健派で、以上の五人からこのパーティーは成っていた。それにしても、五人という人数は夏合宿だけ考えてみても極端に少なく、いろいろな意味で濃くなっていたと思う。

八月十日(水) 晴 ついに遭難か。

今日の目標は仙人窟岳I峰から見えた国見山である。運が良ければ、それより先の瓢箪山やスーパー林道まで行くと、みんなで話しあう。仙人窟岳からの下りで小林が蜂におそわれたこと以外はいつも通り順調に進み、十二時頃には最低鞍部付近に来る。そこから西側に国見山のスラブすなわち、トクズレを見る。谷底に少し雪が残っており、下は絶壁となっていて恐しい風景である。スラブが見事だ。その次の笹の急登で僕はいやけをさし、また、予定より進むペースが早いこともあって、不必要と思われる水を国見山の登りの途中で捨てることにした。そして今日中に三方岩の駐車場まで行くことに決める。ところが、これがとんでもない誤った判断で、この後の行動に大きく影響を及ぼした。

次のピッチで国見山の頂上付近に来たのだが、非常に広く、沢すじがいくつも入りこんで迷いやすい。そして、実際、視界があった(晴れていた)にもかかわらず、リングワンデリングをしてしまい大きなタイムロスをしてしまう。国見山は一面、背丈を越える笹原であるが、今までにも同じような所を歩いており、迷ってしまうようなことはなかった。陽がかったむきはじめ、みんなあせっていたためか、とんでもないことになった。この時、僕の頭の中には遭難の二文字が、そして、今日中にスーパー林道へ下りることが不可能なのではないかという焦りや不安が錯綜していた。自分自身、アドレナリンが分泌されるのがよくわかった。思わず自らトップをして、先へ進もうとするが、水の入っ

ていない軽いザックにもかかわらず、ヤブをこぐスピードに大差はなく、思うように距離をかせげない。国見山付近は平坦であることからわかるようにテン設可能な所は何ヶ所かあったのだが、水がないため先を急ぐより道はなかった。

結局、瓢箪山にたどりついたのは迎日も暗くなりはじめた六時過ぎで、七時過ぎについて行動するのは不可能と判断し、溝状の傾斜地にテントを張る。みんな精神的にも、肉体的にも疲労しきって、テン設にもやたら時間がかった。このとき、水は六とぐらいしかなく、その日の夕食はゼリーと水だけであった。行動時間はなんと十四時間三十分で二日目の十二時間四十分よりも長いものとなった。

しかし、誰一人として、愚痴を言ったりキレたりする者がいないのがうれしく、パーティーの結団力の強さをあらためて知った。疲れのため、すぐに寝入ったが、溝のため地面がすり鉢状となつて、体育座りをしたような格好で寝ていたため、夜中に何回か起きた。

八月十一日(木) 晴 本日のヤブ明けだ

朝食に水を用いないで食べられるカロリメイトを口に入れ、すぐに出発する。道が絶対ある瓢箪山の展望台までは目と鼻の先でPで立てた。空はまっ青で特に白山が美しい。本来ならば、ここからさらに稜線上を歩き三方岩岳まで行くべきなのかもしれない。しかし、ここからは地図上に道があり、また、僕らには三方岩岳まで行く水もない。したがって次回の白山-BHより劣ることになるかもしれないが、そう思ったことは、今この展望台に生きてこれたということを考えればどうでもいいことなのかもしれないし、実際、皆の顔には今までみたことのないような満たされた表情であふれていた。昨日の行動がかなりひどかったせいもあるが、この時の気持ちは、ヤブをこいだことによつてのみ得られるようなものだった。それまでの他の山行にはない、何か独特な冒険的な要素の強いものだからだろう。でもそれだけではないもっと深い何かがあるような気がする。

しばらく展望台でそれぞれ思いにふけた後、三方岩駐車場へ向かい、そこで昨夜食べなかったジフィーズをつくり、今日一日の時間を何も気にせず自由に使う。時間とい

うものに対しても、ヤブの中では焦燥した感があったが、ここでは無用である。道があるということによって、これから先の計画がたてられ、それに沿って行動すればよいのだから。

午後はアオモリトドマツのある三方岩小屋跡で昼寝をする。食缶の中から食料をとりだして、夕食はひさしぶりに豪華なものとなり、みんなの会話ははずんだ。

八月十二日(金) 晴 快適な山歩きをする

三方岩岳の頂上でモルゲンロートの北アルプスを眺めた後、北従走路を南下する。このコースは千七百m前後の山々の稜線上を辿っているのだが、樹木に視界をとられることのない開放的なところで池塘なども道のわきにあつて静かな山歩きのできるルートだ。ひさしぶりにまともな道を歩き、あらためて道のありがたさがわかった。登り下りが少ないこともあって、歩くスピードが今までと格段に変わる。東側には堂々とした奥三方岳や三方崩山が聳えており、庄川をはさんで猿ヶ馬場山などの山々も見える。

オモ谷でゆっくり休んだ後、急登を登って屋前にゴマ平ヒュッテに着いた。このコース中、人に会ったのはゴマ平ヒュッテとその付近だけで、マイナーなコースだということを実感する。ゴマ平ヒュッテにいた人達も中宮道で下山するらしい。

小屋のノートには前回の白山-ベルクハイムの記録が残っていた。午後に単独の人がきて、小屋は僕らとその人だけでとても静かだった。

八月十三日(土) 晴 ↓ガス 白山本峰に立つ

暗いうちに出発する。聞名古の頭の手前で燃えるような朝日をうけながら笹原の中を歩く。とても印象に残る風景だった。この頃は昨日、見えなかった白山が晴れていたのだが登るにつれガスがどんどん下りてきて、ヤブの中とはうってかわり寒いくらいだった。お花松原やヒルバオ雪溪のあたりでは完全にガスって、風景を楽しむといった余裕はほとんどなかった。

猛烈な風の中、とりあえず大汝峰に立つ。そして、今回の山行の最高地点である御前峰に向かう。頂上からは大汝峰と同様、ガスのためにもみえない。僕は前回白山に

来ているが、ほとんど晴れたことはない。早々に室堂に行くと、おじさん、おばさんでござったがえしており、今までのギャップに閉口する。昼食にマルタイをたべ、トンビ岩コースで南龍に行くことにした。南龍は室堂と異なり、静かで箱庭のような美しさで僕らをむかえてくれる。今日も早い時間にテン場に着き、ゆっくりと過ごすことができた。

八月十五日(日) 風雨↓晴 南龍ヶ馬場で休養する
朝、起きたとき雨だったので沈殿する。適当に一日を過ごすつもりだったが、この五人である。誰かが何かしようと言うこともなく、退屈で仕方なかった。

夕方五時から松任谷由実のラジオを聞いてみんなでもりあがる。第二回トレ山のときからこの番組を聞いており三週連続聞いていた。うちのパーティーでは一種のブームとなっていて、特に恋愛相談のコーナーのあやしい話にハマりまくっていた。

八月十五日(月) 晴 遂にこの山行も終わる

昨夜のミーティングで大日ヶ岳方面に向かうと、合ワんにまにあわないことになりそうだったので、石徹白に下りることとした。夏合宿が貫徹されずに正直いって未練があったが止むを得なかった。また、とばしい食料で再びヤブに入ることに對して不安もあった。

石徹白へ下るコースでも人は少なく、笹が主体の美しいコースだった。神鳩ノ宮避難小屋で関東方面の大学の記録を目にする。結構、ヤブこぎをしにこの辺りに来ているようだ。それによると大日ヶ岳―丸山の間は刈り後があるそうで、本当のヤブではないと書かれていた。

小屋から先も下山パワ―でぐんぐん下り石徹白のスギで休憩する。そこに家族連れの観光客が来ており、「どこから来たのか」とたずねられたので「金沢市からです」と答えたらみんな目をまるくしてビックリしていた。

だからと長い林道を炎天下の中ひたすら歩く。この辺りは名古屋から近いのでオートキャンプの人がたくさんいた。

石徹白は四方を完全に山に囲まれたまさに陸の孤島といった感じのところだが、町全体どこなくなつかしい趣き

をかもしれないとあり、僕は一気に気にいってしまった。町のあらゆるところに小川が流れており、それが町の美しさを一層ひきたてている。今までのいろいろな山に登ってきたが、大抵どの登山口も観光地化されているか、あるいは何も無いようなところばかりである。しかし石徹白は、まさに山とともに生活が密着している、白山信仰とのかかわりが深い歴史を感じさせる場所であった。これからの日程を考えて休んでいた僕らに、地元のおじさんがジョースをくれたりと、素朴さを感じる一幕もあった。

結局、今日中には帰れないことがわかり、小学校にテントを張った。

八月十六日(火) 晴 一路金沢へ

個人山行という名目で大日ヶ岳を登ろうともくろんでいたが、バスの時間があわないこともあって、素直に金沢へ帰ることにする。石徹白から町営のバスで美濃白鳥へ向かう。こども、のどかなところでもう一度おとずれてみたいところだ。どことなく鶴来に似た雰囲気ので岐阜県のとこの深さがよくわかる。美濃白鳥でバスを乗りつぎ九頭竜湖からJRで金沢へ帰った。これだけ長く充実した山行だったにもかかわらず、帰りの乗り物の中では満足感にひたることでできず、しっくりいかない状態だった。その時、ずっと考えていたことは「もし、最後までいっていたら」という後悔の念と「これで精一杯だった」という自分自身を納得させようとするなぐさめによる葛藤から生じたものであった。

山行中リーダーとして失敗ばかりしていた僕に對して、最後までつきあってくれた二年生四人には本当に感謝しています。また、夏合宿としてヤブを出すという前例のないことをしたにもかかわらず、誰一人として反対せず協力してくれた三年生のみんなにも感謝しています。

